

皇帝制曰聖仁
 人承運
 奉
 廣運兄天
 覆地載莫
 不尊親帝
 命將暨
 海隅日出
 固不平俾
 昔我
 皇祖誕育多方
 龜紐龍章
 趙錫扶桑

之域貞珉
 大篆榮施
 鎮國之山
 嗣以海波
 之揚偶致
 風占之隔
 當茲盛際
 宜贊彝章
 管爾豐臣
 平秀吉燭
 起海邦如
 尊中國西
 馳一介之
 捷欣慕來
 同吐叩萬
 聖之闢懇
 求內附情
 既堅於恭
 順恩可斯
 於柔懷茲
 特封爾為

第一圖 萬曆二十三年封豐臣秀吉日本國王詔命（大阪市立博物館藏）

萬曆三十五年五月

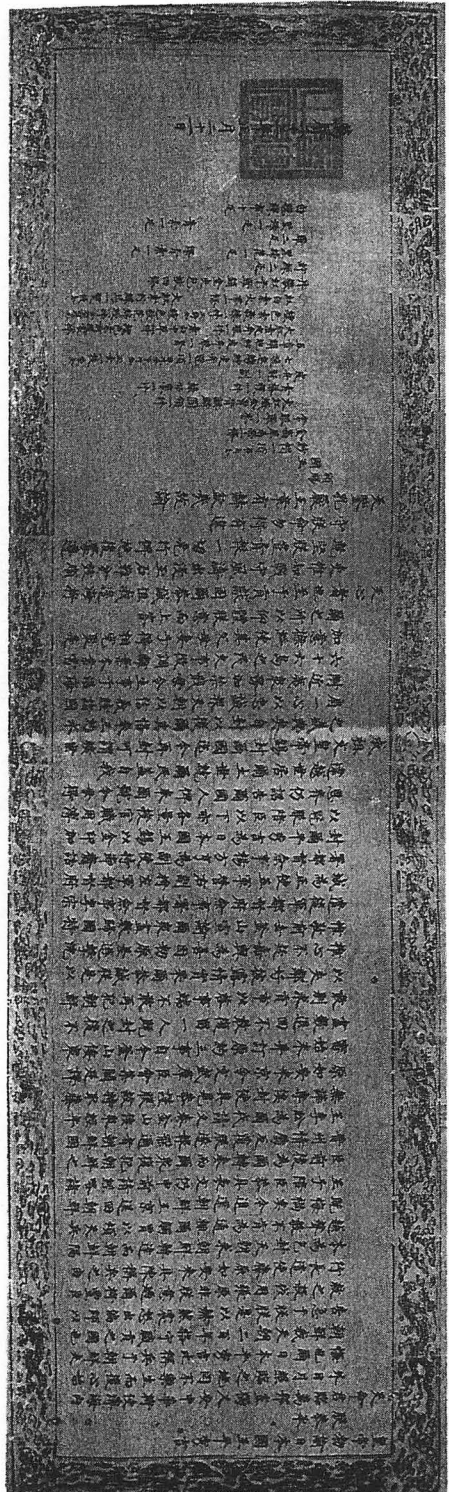
欽哉

日本國王
錫之詔命
於戲寵賁
芝函襲冠
宸於海表
風行青眼
國藩衛於
天朝爾其
念臣職之
當修恪循
要東感皇
恩之已渥
無替款誠
祇服綸言
永遵聲教

萬曆三十五年五月



第二回 同 前

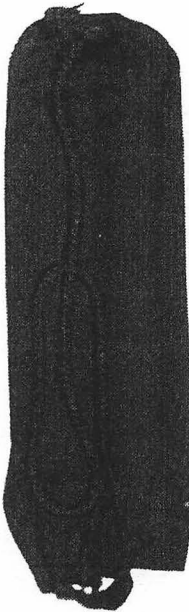


第三図 1 萬曆二十三年勅諭 (宮内庁書陵部蔵)

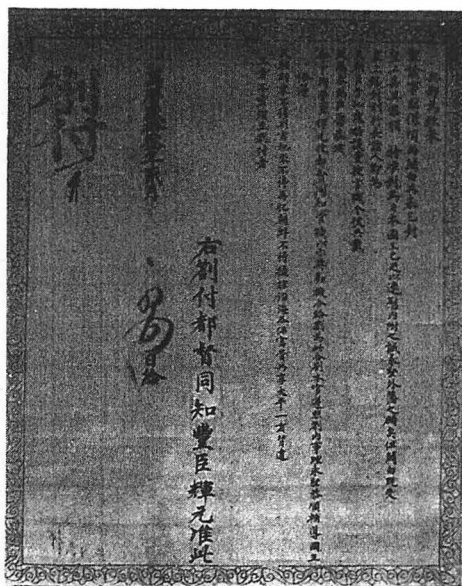


2 語命と袋

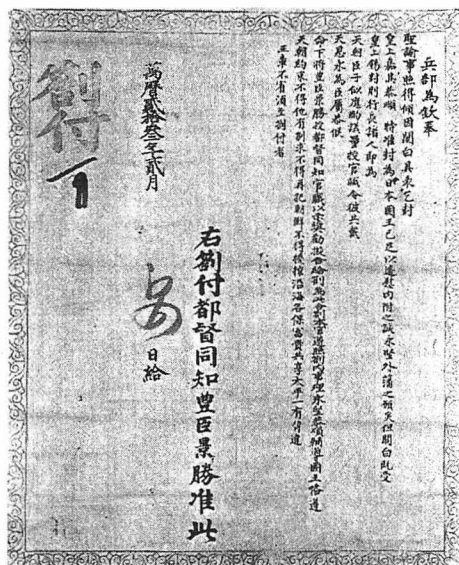
語命を巻いた袋と語命を入れて運んだという袋。袋は藍色に地文があり、組ひもがついている。巻いた語命は直径7.5cm, 軸の玉1.8cmである。語命の帯は五色。破損して今にも切れそうである。



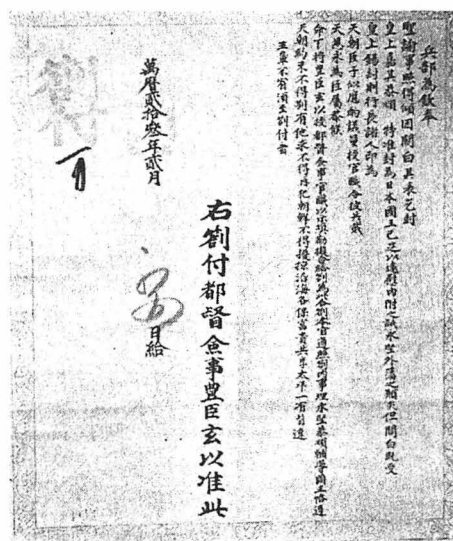
第四図 明兵部省劄付



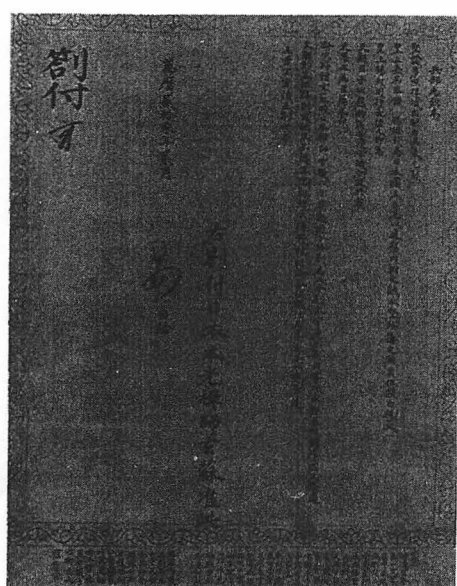
1 毛利輝元宛
(毛利博物館蔵)



2 上杉景勝宛
(上杉神社蔵)



3 前田玄以宛 (模本)
(東京大学史料館蔵)



4 僧玄蘇宛 (模本)
(松浦史料博物館蔵)

豊臣秀吉を日本国王に封ずる誥命について

——我が国に現存する明代の誥勅——

大庭 脩

はじめに

一 豊臣秀吉を日本国王に封ずる誥命

(イ) 誥命

(ロ) 勅諭

(ハ) 別幅と妙法院所藏の衣裳

(ニ) 下将に対する割付

(ホ) 考察

二 我が国に現存する明代の誥勅

(イ) 天啓二年某氏誥命零文

(ロ) 嘉靖二十四年王以旂祖父王施、祖母顧氏誥命

(ハ) 万曆六年申時行、同妻王氏誥命

(ニ) 成化六年張謙之母王氏勅命

(ホ) 嘉靖十五年張祿、同亡妻廖氏、継室葉氏勅命

結びにかえて

豊臣秀吉を日本国王に封ずる誥命について（大庭）

はじめに

中国における官僚制を研究するための一手段として、私は官僚任命に当って給付される辞令書について二、三の研究を公けにしたことがある^①。それは主として唐以前のものについて行なったのであったが、宋以降のものについても関心があることは勿論で、折にふれてその資料を集めることを心がけてきた。本稿では、明代の辞令書について多少の知見をのべたいと思う。とはいふものの、明代に関する知識の極めて薄い者であるから、思わぬ失考をおかすかも知れない。各位の示教を期待する次第である。

従来私が歴代の辞令書の研究にあたってきた基本的態度は、なるべくその実物に即して行なうということであった。ところが中国の歴史資料に対する関心は、当然のことながら古い時代に関して高く、そうでなければまた、当然のことながら革命ないしそれ

以後の、近代化をめぐる資料に関して高く、明清の辞令書などは一番関心の持たれることが少ないものである。私は、中国において明代の辞令書がどれ程保存されているか、又、欧米諸国の博物館等においてその遺存例があるかどうかは何も知識がない。これまた各位の示教に俟たねばならぬことである。

そこで、本稿にあっては、我が国内に保存されている明代の辞令、及びその原型を著録されているもの、並にその附属資料で、管見にはいったものを中心に考えざるを得ない。かつて私は、この研究をすすめるために、^④全国の主な博物館、美術館にあてて明代資料の所蔵の有無を問いあわせたが、その結果は案外乏しいことがわかった。そして、我が国に保存されているものの中では、万曆二十三年に明の神宗が豊臣秀吉を日本国王に封じたものが、その日本史上における歴史的価値を考慮の外に置いても、最も優れた遺品であると考えられる。従って本稿では、この秀吉に与えられた辞令を中心にして考察をすすめることとする。なお、文禄の役などに関する歴史上の諸問題に関しては考察の外に置き、^⑤専ら明代の遺品という目で見えることを立前とする。

一 豊臣秀吉を日本国王に封ずる誥命

(イ) 誥 命

万曆二十三年正月二十一日づけを以て豊臣秀吉を日本国王に封ずる辞令書が発せられた。明制によれば「誥命」となづける文書であ

る。この誥命は今日、大阪市立博物館に蔵され、国の重要文化財に指定されていて、重文指定の名称は「綾本墨書明王贈豊太閣冊封文」である。^⑥この重文指定の対象には、冊封使が誥命を納れて首にかけてきた袋まで含んでいる。(第三図の2)
まずその本文を紹介しよう。(第一・二図)

奉天誥命(昇龍織文)
(降龍織文)

率

天承運

皇帝制曰聖仁

廣運凡天

覆地載莫

不尊親帝

命溥將暨

海隅日出

罔不率俾

昔我

皇祖誕育多方

龜紐龍章

遠錫扶桑

之域貞珉

大篆榮施

青 (無文) 46.9	赤 (文飛飛 鶴雲) 84.5	黄 (文飛飛 鶴雲) 123.2
-------------------	-----------------------	------------------------

豊臣秀吉を日本国王に封する詔命について（大庭）

鎮國之山 嗣以海波 之揚偶致 風占之隔 當茲盛際 宜績彝章 咨爾豐臣 平秀吉崛 起海邦知 尊中國西 馳一介之 使欣慕來 同北叩萬 里之關懇 求內附情 既堅於恭 順恩可斬 於柔懷茲 特封爾爲 日本國王 錫之誥命 於戲寵賁 芝函襲冠 裳於海表 風行卉服

赤	青	黒	白
文飛飛 鶴雲	文飛飛 鶴雲	文飛飛 鶴雲	文飛飛 鶴雲
241.8	200.7	161.6	

萬曆二十三年正月二十一日
 禮字壹百肆拾號
 (半字)
 (之寶)
 (之制寶誥)

固藩衛於 天朝爾其 念臣職之 當修恪循 要束感皇 恩之己渥 無替欵誠 祗服綸言 永遵聲教 欽哉

青 (雲鶴文)	黒 (雲鶴文)	白 文飛飛 鶴雲	黄 文飛飛 鶴雲	
430.5	391	362.2	315.8	278.2

萬曆十四年 月 日造

(篆書織文)

萬曆十八年十一月分表背匠金光

織匠郭堂
挽匠周清

赤 (雲鶴文)	黄 (無文)	緞子
------------	-----------	----

511.4 501.2 467.1

まずこの誥命は巾三一・三センチ、長さ五〇一・二センチの錦に書かれ、更に錦地に緞子がつづき、軸がつく。錦は前から約四〇センチ前後の長さごとに、青・赤・黄・白・黒の五色に織りわけられ、この五色を二度くりかえした上で三度目の黄色にいたった所で終っている。色は木(青)・火(赤)・土(黄)・金(白)・水(黒)の五行の色で、水にあたる黒色は、純黒では墨では書けないことから薄い黒色であった筈であるが、時代を経て褪色し、一見茶色と見える。しかし論理的に黒と見なければならぬ。

最初の青の部分は前に昇り龍、後に降り龍を配して中間に奉天誥命と篆書の文字があり、龍も文字も織り出してある。誥の本文は赤の部分から書き始め、立派な楷書で一行六字、五十行にわたって書かれている。もっとも一行六字といっても、天、皇帝、皇祖の文字を二字抬頭しているので、普通の文章は一行四字である。

文章は二まわり目の白地の初めで終り、白地の中央に年月日を書き、その上に「制誥之寶」という文の、たて一二・五センチ、よこ一二・七五センチの朱印がおされている。

次に白地の最後のあたり、左上方に「之寶」の印文をもつ印の左半分がみえ、印の下の方には文字の左半分が見えている。そのあと黒青赤とつづき、ここには何の文章もないが巻物の中の方であるので最終の赤の部分など今なお色鮮やかである。最初の赤からここまで、鶴と雲との地模様が入っている。鶴がたてに三羽、二羽とあり間に雲が入って、四十センチ平均の各色の中には計二十羽の鶴が右上に向って羽をひろげて飛翔していて、文字のない部分など誠に美しい錦である。

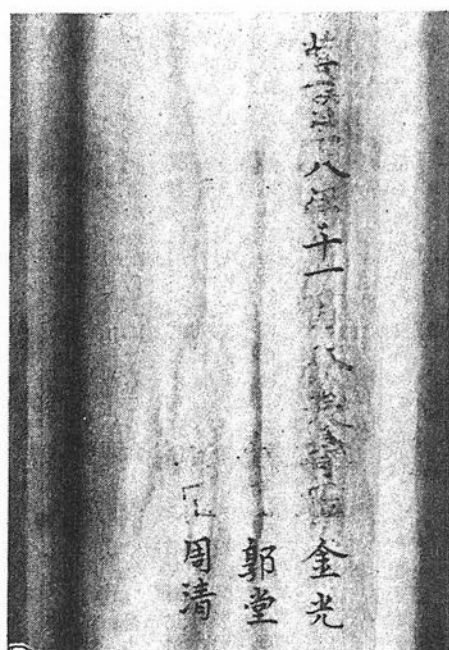
最後の黄色の部分は地文がなく、末端の所に「萬曆十四年月日造」の八字が篆書で織り出されている。それにつづいて緞子がわずかにつづき、その端を軸に巻きつけてある。卷子全体を紙で裏打ちし、緞子の裏側の所に

萬曆十八年十一月分表背匠金光

織匠郭堂

挽匠周清

の文字があり、。印をつけた文字は墨書され、その他の文字は墨印字である(挿図1)。挽匠は挽綜工、現名空引工で綜統をあげる職人である。軸頭には美しい緑がかった直径一・八センチの玉が用いられている。以上が状況の概略である。



挿圖 1

さてこの状態を明の制度と比較してみようと思う。

大明會典卷六、誥勅の條には

凡誥勅等級、洪武二十六年定、一品至五品皆授以誥命、六品至九品皆授以勅命。

とあり、五品官以上は誥命、六品官以下は勅命を以て任命することが基本の制度である。

また同じ所に

誥用制誥之寶、勅用勅命之寶、仍以文簿與誥勅各編字號、復用寶識之。文簿藏於內府。

と記している。日附の上に制誥之宝の印があるのはこれに合し、また文簿と誥勅とを字号に編し、宝を用いて識すところのは、日附印の

豊臣秀吉を日本国王に封する誥命について（大庭）

後、左上にある半字、半印の部分に当る。原簿と支給する誥勅とを、字号を以て編し、宝を用いて識すというのは、要するに割字、割印をほどこし、原簿と合するようにするのである。割字に関して、大明會典卷二二二の中書舎人の所に、

凡該用誥勅軸、俱於御前奏過、將原領印綬監勘合號紙、備細填寫各該給誥勅職名品軸數、繳進該監比對、登記內號底簿照數領用、其號紙、文官并王府、蕃王、土官與武職、舊製俱用智字號、武官、新製用仁字號。

とし、更に続いて

凡寫完誥勅軸、類編勘合底簿。公侯伯内外文武官、舊用二十八宿、後更定、公侯伯本身并追封、用仁義禮智字。蕃王及文官一品二品本身同。三品以下用十二支字、追封用文行忠信等字。武官新製續誥用千字文。請誥仍用二十八宿。永樂以後請誥用急就章、螭夷土官各從文武類編、每字編滿一千道、仍從前續編。

とある。文武官の別、官品別などによって字号を変え、それぞれの字は千を限度として番号を与えてゆくのである。この秀吉の誥命は割字割印の右半分が大きく底簿にかかったため、左半分の誥勅上に残っている部分が少なく読み難いが、最初の文字は見ただけでは判断できないので後にまわすとして、□字壹百肆拾号と読める。この上におす割印の印は、他の誥命、勅命の例よりして「広運之寶」であることは明らかである。「制誥之寶」「勅命之寶」「広運之寶」いずれも尚宝司の項にみえ、明初よりの天子十七宝中の一である。

次に誥命の布地の作成について述べてみると、大明會典卷二二二中書舍人の条に

凡誥勅軸、俱南京織染局織造、齎送工部、送印綬監、會同掌印官、檢選收貯、或不堪用、仍會同參奏。

とあって、南京の織染局で織造する。卷二〇一の織造に

誥織用五色紵絲、其前織文曰奉天誥命、勅織用純白綾、其前織文曰奉天勅命、俱用升降龍文、左右盤繞、後俱織某年月日造、帶俱用五色。

という記事も織造の錦に関する材料である。誥が五色の紵絲で織られること、升起降りの龍文が左右にめぐった奉天誥命の織文があること、後には某年月日造と織ること、いずれも秀吉誥命には規定の通りになっている。奉天誥命及び某年月日造の織文が篆体であることは、実物を見なければわからない。会典にはそこまで述べていない。

この二つの記事から明らかになることは、誥勅の軸はあらかじめ南京織染局で織造され、工部におくられた上で掌印官等立会のもとに品質の点検を受けた後貯えられているのであって、誥勅の軸の最後に某年月日造と織文を入れるのは、本来は製造の時を入れたものだという事である。

あらかじめ織造されていたものを使用するという事がわかってみれば、秀吉の誥軸が全長六メートルにも及ぶものでありながら、誥文は三メートル五〇センチ程で終り、その後一メートル余は生地

ままである理由がわかるのであって、誥文が長文である場合に備えて、余裕をもって織造してあるのだというわけである。また、後に万曆十四年月日造とあっても、裏側の紙の部分に万曆十八年十一月分として、表背匠、織匠、挽匠の名前が入っていることは、この軸そのものの織造時期は十八年十一月で、表の十四年云々の篆字は単にその織型を用いたにすぎないこと、紙背の文字の内、十八年の八と、十一月の十一、工人名が書入れて、他は印字であるのは、これ又、何軸も作って納めるものを、南京織染局で事務的に記入していったことを意味している。

次に大明會典卷二二二中書舍人の條には

凡文武官誥勅軸、舊製官一品雲鶴錦、夫人雲鸞錦、俱玉軸、二品獅子、夫人鸞鷟、俱犀軸、三品・四品瑞荷、淑人・恭人芙蓉、俱金軸、五品瑞草、宜人四季花、俱角軸、六品・七品、安人、孺人俱葵花、烏木軸、及八品九品官同。文用玉箸篆、武用柳葉篆、品級花樣引首同。新製武官誥軸、一品至七品、俱鎧甲葵花引首抹金軸、仍用柳葉篆文、今兼用之。

とのべて、それぞれの官品に見合う錦の織文様と軸の素材について書いている。夫人、淑人、恭人、宜人、安人、孺人は女性の位であると同時に、それぞれの官品に擬され、妻は夫の官品に準じてどれかを授与されるのである。

そこで大明會典の右の記事によれば、雲鶴錦、飛雲飛鶴文は最初文武官一品に用いたが、後には武官の方が変わったので、明末では文

官一品に用いられる錦であるということになる。同じく卷二二二には

凡王府誥軸、舊製王雲龍、王夫人雲鳳、軸嵌七寶、後親郡王俱用冊、惟親郡王生母封夫人者仍給誥命如舊製。

としていて、親王、郡王などの場合には錦は雲龍で、軸は嵌七宝であったが、後には冊を用いるようになったわけである。従って、日本国王に封ずる場合、雲鶴の錦を用いていることは、親、郡王となら明らかに格落ちの取扱いになっていることが認められる。ところが、同巻の

凡寫完誥勅軸、類編勘合底簿、公侯伯内外文武官、舊用二十八宿、後更定公侯伯本身并追封、用仁義禮智字、蕃王及文官一品二品本身同。三品以下用十二支字、追封用文行忠信等字、武官新製、續誥用千字文、請誥仍二十八宿、永樂以後請誥用急就章、蛮夷土官各從文武類編、每字編滿一千道、仍從前續編。

という文章は甚だ重要である。これは誥勅の文字を書き終えた軸を整理して底簿に記録する、割字割印をする場合の割字になる文字について書いているのであるが、公侯伯と内外文武官はもとは二十八宿の名称の文字を使っていたが、後には更めて、公侯伯の本人の場合と追封の場合は仁・義・礼・智の字を用いることとし、蕃王と文官一品・二品の本人の場合はこれと同じ扱いにすることになった。

この中に蕃王が文官一品・二品と同じ取扱いになっていることが注目される。即ち秀吉を日本国王に封ずるのは蕃王としての

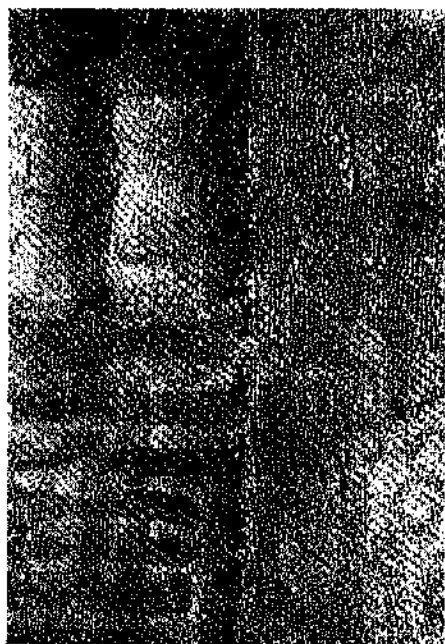
豊臣秀吉を日本国王に封ずる誥命について（大庭）

取扱いであって、従って文官一品と同じ雲鶴錦を用いたのだと考えられるからである。そのことが誤まりでない証拠は、神宗実録二八一、万曆二十三年正月庚辰（七日）の礼部尚書范謙の上請を見ると、
禮部范謙請、給豐臣平秀吉、皮弁冠服紵絲等項及誥命詔勅印章、先是、小西飛稱日本已無國王、以秀吉上請、本部擬封爲順化王、奉旨平秀吉准封日本國王。故事外夷襲封、例賜皮弁冠服及誥勅等項、惟始封有印章、日本自永樂初錫封、賜有龜鈕金印、時小西飛供稱舊印已無、似宜另行鑄給、故兼有是請、詔從之。

とあって、礼部では秀吉を順化王に擬し、外夷襲封の故事にもとづいて皮弁冠服、誥勅等を賜与しようとしており、例外として永楽帝の時代に封じた時の金印が今はないということなので、これを別に鑄て授けようと請うている。

また同じ神宗実録の同年同月乙酉にある兵部尚書石星の題では
乙酉、兵部石星題、關白具表乞封、上特准封爲日本國王、查隆慶年間初封順義王舊例、其頭目効順者、授以龍虎將軍等職……

とあって、これは後に改めて述べるが、秀吉の下将を封ずるにあたって、まず先例を述べた部分である。隆慶年間の初封順義王旧例というのは、隆慶五年に北虜俺噠を順義王に封じたことを先例として指す。倭と講和することを主張する沈惟敬等明の官僚の一派は、この先例を想起して封王、講和を主張していたのである。従ってこれらの資料は、「誥命が雲鶴錦であることは、誥命の制度からそれが蕃王の制である」と考える私の説に文献的な裏附を提供するもので



挿圖 2

ある。

このように蕃王としての取扱いという判断が確認されると、先にひいた大明会典の割字に関する記事の中で、

公侯伯の本身、并に追封は仁義禮智の字を用う。蕃王及び文官一品二品の本身も同じ。

という文が重要になる。本身は追封と併列に表現されているから、生きている本人を限定して指しているわけであるが、秀吉の誥命の割字「□字壹百肆拾号」の最初の字は、この文によって仁、義、礼、智の中のどれかであると限定できる。そうしてみると仁、義のどちらでもないことは明らかである。また残存する文字が一字分の長さ全体にわたっている点より智の左の矢の部分と考えることも不可能

がある。従って、礼という文字の、「しめすへん」を示でなくネと書いた左端がのぞいていると考えるべきであるという結論に達する。私はそれで、禮字壹百肆拾号という読み方を提唱する。(挿圖 2)

次に誥命の文章について少しふれて置こう。まず奉天承運皇帝という称であるが、これは恐らく元代の宣に上天眷命皇帝と称するのにならったものであらう。^①元の上天眷命の語は、恐らく書経、大禹謨の

皇天眷命、奄有四海、為天下君。

あたりから出たものに違いない。

語文が、奉天承運皇帝制して曰くとして、全文皇帝直接の命令のみが書かれていることは、唐代の告身が三省を経過する復合文書の形態をとっていたのに比較して、いかにも皇帝独裁制が確立したといわれる明代らしい特色である。

次に「我が皇祖、多方を誕育し、龜紐龍章遠く扶桑の域に錫い、貞珉大篆、榮を鎮国の山に施す」という文章の、我が皇祖とあるのは永楽帝のことである。龜紐龍章が印を意味することは申すまでもないが、貞珉は堅くて美しい石を意味し、貞珉大篆でやはり印のことである。従ってここは、かつて永楽帝が足利義満に金印を授けたことを指している。義満に金印を授ける制は永楽元年十一月十七日に発せられており、その文は善隣国宝記巻中の応永十年の条に出ている。また、件の金印が亡失されている由を小西飛騨守が称したこ

とは先に礼部尚書范謙の上請のところで述べた。「榮を鎮国の山に施す」の句は、小西行長、沈惟敬らの偽作したという「関白降表」の中に

冀得天朝龍章恩錫、以爲日本鎮國龍榮。

とある文にも関連があるように思える。

「海邦に崛起し」という崛起はにわかにおこることである。「於戲、龍を芝函に貢り、冠裳を海表に饗う。」の芝函は、「爰に殺巨に差し、芝函に載せ啓く」(冊封王氏爲榮妃文)などと同様、芝の函で、誥命や印などをおさめた函をかざって表現したものであらう。

「風を弁服に行ない」の弁服はくずあさの服の意味であるが、書経禹貢の「島夷卉服」に典拠を以て島夷即ち倭を指している。文章は冊書の文体に近くしてあるが、蛮夷に対するものだけあって高飛車である。

秀吉を日本国王に封ずる誥命については、以上を以ては、考察し終ったのであるが、そこで問題は二つに分かれ、一つは更にこの時にもたらされた文書類に関する事、他の一つは別に存する明代の誥命の例に関する事である。ここではまず、同時にもたらされた文書類についてみてゆきたい。

(四) 勅 諭

誥命は、要は日本国王に封ずるということであって、秀吉軍と明軍との講和条件であるとか、秀吉軍と朝鮮との関係であるとかい

ような最も現実的な問題に関しては、何等ふれることがない。それは誥命の性格上当然であって、現実的な問題に関しては、同時にもたらされた勅諭に述べられている。今、その勅諭は、宮内庁書陵部に所蔵されている。まず本文を掲載してみよう。(第三図の1)

皇帝勅諭日本國王平秀吉

朕恭承

天命君臨萬邦豈獨以安中華將使海內
外日月照臨之地罔不樂生而後心始
懷也爾日本平秀吉比稱兵于朝鮮夫
朝鮮我天朝二百年恪守職貢之國也
告急于朕朕是以赫然震怒出偏師以
救之殺伐用張原非朕意迺爾將暨臣
行長遣使藤原如安來具陳稱兵之由
本爲乞封天朝求朝鮮轉達而朝鮮隔
越聲教不肯爲通輒爾觸冒以煩天兵
既悔禍矣今退還朝鮮王京送回朝鮮
王子陪臣恭具表文仍申前請經略諸
臣前後爲爾轉奏而爾衆復犯朝鮮之
晉州情屬反覆朕遂報罷爾者朝鮮國
王李昖爲爾代請又奏釜山倭衆經年
無譴專俟封使具見恭謹朕故特取藤
原如安來京令文武羣臣會集國廷譯

審始末并訂原約三事自今金山倭衆
盡數退回不敢復留一人既封之後不
敢別求賈市以啓事端不敢再犯朝鮮

以失鄰好披露情實果爾恭誠朕是以
推心不疑嘉與爲善因勅原差遊擊沈

惟敬前去釜山宣諭爾衆盡數歸國特
遣後軍都督府僉事署都督僉事李宗

城爲正使五軍營右副將左軍都督府
署都督僉事楊方亨爲副使持節齎誥

封爾平秀吉爲日本國王錫以金印加
以冠服陪臣以下亦各量授官職用博

恩賚仍詔告爾國人俾率爾號令毋得
違越世居爾土世統爾民蓋自我

成祖文皇帝錫封爾國迄今再封可謂曠世
之盛典矣自封以後爾其恪奉三約永

肩一心以忠誠報天朝以信義睦諸國
附近夷衆務加禁戢毋令生事于沿海

六十六島之民久事徵調離棄本業當
加意撫綏使其父母妻子得相完聚是

爾之所以仰體朕意而上答
天心者也至于貢獻固爾恭誠但我邊海將

吏惟知戰守風濤出沒玉石難分效順

既歷朕豈責報一切免行俾絕後釁遵
守朕命勿得有違

天監孔嚴王章有赫欽哉故諡

領賜

國王

紗帽一領 犀角金

金箱犀角帶一條

常服羅一套

大紅織金臂背麒麟團領一件

青格襖一件 綠貼裏一件

皮弁冠一副

七腕弁皂縐紗皮弁冠一頂 緞珠金事件金玉圭一枝 鍍金

五章綢地紗皮弁服一套

大紅皮弁服一件 素白中單一件 羅色素前後裳一件

羅色素蔽膝一件 玉鈎金縐色粧花錦綬一件 金鈎玉打帶金

紅白素大帶一條 大紅素紵絲綢一雙 襪金

丹鑲紅平羅銷金夾包袂四條

紵絲二疋

黑綠花一疋 深青素一疋

羅二疋

黑綠一疋 青素一疋

白縐絲布十疋

萬曆二十三年正月二十一日

印廣
寶通
之寶

この勅諭は「明神宗贈豊太閤書」の名で書陵部に保管され、『圖書寮典籍解題歴史篇』の古文書の部に解題されている。料紙は五三センチに一七二・八センチの一枚渡の唐紙、周囲に二重のわくをめぐらし、わくの幅は五・五センチ、その中には七宝龍紋模様が墨で摺られている。

この勅諭がどういう系路で伝来したかは、なお考究せねばならないのであるが、現在掛幅仕立の上包に縫付けた白帛に「天保九年四月廿一日平戸老侯宛 垣記」の墨記があり、「愛日樓藏書」の朱印を捺してあるのは佐藤一齋の手にあったことを意味し、平戸老侯は松浦清、平戸藩主の松浦静山である。ところが、豊前の人伊藤威山の『隣交徴書』二篇巻之一にこの文が「諭日本国王平秀吉書并別幅」として掲載され、その末尾には漢文で

此書現存して瑕なし。蓋し講和徒、陰謀通ぜず、因りて扯裂を免れたるか。眞書は肥前運池成留氏の藏。

と書いている。『隣交徴書』第二篇は天保十年に出版されているが、松浦静山から佐藤一齋へ贈られたのが天保九年であるから、恐らく静山の手に入る以前に肥前鍋島の支藩である蓮池藩の家老成留氏の手にあったことがあり、伊藤威山はその時に実見記録したのではないかと思う。

文中、豊臣行長が使藤原如安をつかわし、本来封を天朝に乞うことを為し、朝鮮に転達を求めたのに朝鮮が通じなかつたので出兵したのだと称兵の由を陳べしめたとあり、そして今、表文を具して前

諸を申すという。この表文が所謂関白降表といわれるもので、李朝宣祖実録卷五一、二七年五月にみえる。その文は

萬曆二十三年十二月二十一日日本關白臣平秀吉誠惶誠恐稽首頓首、上言請告、伏以、上聖普照之明、無微不悉。下國幽隱之曲、有求則鳴。披瀝愚衷、仰于天聽。恭惟皇帝陛下、天佑一德、日清四方。皇極建而、舞千羽于兩階、聖武昭而、柔遠人于萬國。天恩浩蕩、遍及遐邇之蒼生。日本渺茫、咸作天朝之赤子。屢托朝鮮而轉達、竟爲秘匿而不聞。控訴無門、飲恨有日、不得已而構怨、非無謂而用兵。且朝鮮詐僞存心、乃爾虛瀆宸聽。若日本忠貞自許、敢迎忍王師。游擊沈惟敬、忠告諭明、而不獲顧訂。豐臣行長等、識誠向化、而界限不逾。詎謂朝鮮構起戰爭。雖致我衆死傷、終無懷棺、第王京。惟敬舊約復申、日本諸將初心不易。邊城郭、獻爾糧、益見輸誠之悃。送儲臣、歸土地、用申恭順之心。今差一將小西飛彈守、陳布赤心。冀得天朝寵章、恩錫以爲日本鎮國寵榮。伏望陛下廓日月照臨之光、弘天地覆載之量。比照舊例、特賜冊封藩王名號、臣秀吉感知遇之洪休、增重鼎台、答高深之大造、豈愛髮膚。世作藩籬之臣、永獻海邦之貢、祈皇基丕著于千年、祝聖壽綿延于萬歲。臣秀吉無任瞻天、仰聖、激切餅營之至。

とある。この後の部分の「冀得天朝寵章、恩錫以爲日本鎮國寵榮」の句が、誥文の中にもこれに応ずる句を見出すので、降表をもとにした冊封であることを思わせるとのべたものである。

次にこの勅諭は正月二十一日付で、誥命と同日に出たが、勅諭と

内容的に極めて近い沈惟敬にあてた勅諭が二月丙午、即ち二月三日に出されている。

神宗實錄二八二によれば、

丙午○皇帝敕諭神機三營添註遊擊將軍署都指揮僉事沈惟敬、今特命爾量帶隨行官兵、齎敕前往釜山宣諭倭將豐臣行長等、彼國初欲求封天朝、因朝鮮不爲代請、以致二國構兵、及天使往諭、即能率衆退避、竟全屬國、今平秀吉表乞內附、朝鮮亦爲請封、朝廷察其恭順、無他特采廷議、已遣正副使二員、齎詔往封平秀吉爲日本國王、令其暫駐遼左、待報方行、爾可諭行長等、速將冊使舟楫等項整飭完備、仍令釜山倭衆盡數歸國、撤毀柵房、不得以倭戶爲辭遣種滋忠、一面傳諭朝鮮國王、待釜倭一退、即從實奏請、冊使啓行、無得生事起釁、以悞重典、爾仍同到日本、宣諭一應冊封禮儀、悉照朝鮮事例、預先申明約要、及諭平秀吉及合國人等、錫封之後、皆我臣屬、務要永遵臣節、不得別求貢市、慎修隣睦、不得再犯朝鮮、六十六搗之衆、悉歸農業、不得竊掠邊海、諸凡約束三事、調戢兩國、俱屬、爾專責應行事務聽爾便宜處置、朝鮮日本諸色人等不得阻撓、要在上尊國體、下定夷情、時畢還日、將爾前後功次一併叙錄、如或貪黷債事、輕率損威、法不輕貸、爾宜慎之、故諭。

とある。約束の三事を繰返して伝えよと命じているし、日本へ行って一応冊封の礼儀を教えよといっている。秀吉宛勅諭と同じ文章を繰返して約束の内容を沈惟敬に伝えている点を見ても、勅諭が実質

的な内容を持っていたことが明らかであろう。

イ 別幅と妙法院所蔵の衣裳

勅諭の本文の後に國王に頒賜すとして細字で書かれているのは、いわゆる別幅である。明帝から足利將軍に頒賜された品々と比較すると極めて少量であることが注目されるが、前に引いた神宗實錄、万曆二十三年正月七日の礼部尚書范謙の請に見える

故事、外夷襲封、例賜皮弁冠服及詰勅等項。

とある皮弁冠服にあたるものである。この明の冠服は、例えば続本朝通鑑などの日本側の記事によれば、秀吉が一着に及んだことになっている。すなわち、文祿五年九月初日、揚方亭、沈惟敬は伏見城に登り、秀吉に謁するが、

惟敬、捧金印及封王之冠服、且授日本諸臣之冠服五十餘具曰、隨其位階而可用之。

とあるように冠服を伝達した。そして翌二日に秀吉は明使に城中において饗を賜わったが、その時のことを

秀吉欲耀威、而著鮮赤衣、蒙明冠、大坐上壇中央、兩使坐中壇右方、神君及秀俊、利家、輝元、秀元、秀信六人、並坐其左方、皆著明冠服。

と記している。

そこで、勅諭の末尾に書かれた冠服について多少の考察を加えておこう。

大明会典の中で皇帝、皇后以下諸官の服装の規定を記すのは、卷六〇、六一の二卷で、皇帝、皇太子、親王、文武官などにつき、それぞれ袞冕、皮弁服、常服、或いは項によつては朝服、公服などを別記している。この勅諭では、紗帽、帯について常服羅一套があり、皮弁冠と五章絹地紗皮弁服がつづき、これで冠服はすべてで、次は包袂、すなわち衣服の包、そしてあとは布である。

常服羅一套の中では勿論大紅織金胄背麒麟円領一件が大切で、大紅織金、すなわち紅地に金糸をまじえて織った、胄背麒麟、胸と背中に麒麟の模様のついた、円領、まるいえりの着物である。

服装の文様、色彩などが官品の品級にもなつて異なり、下級官が上級官の服色を用いることを禁ずるのは歴代王朝共通のことであるが、大明会典卷六一に嘉靖十六年題准として

今後在京在外文武官員、除本等品級服色及特賜外、不許擅用蟒衣飛魚斗牛等項、違禁華異服色。其大紅紵絲紗羅服、惟四品以上官、及在京九卿、翰林院、詹事府、春坊、司經局、尙寶司、光祿寺、鴻臚寺、五品堂上官、經筵講官、方許穿用。其餘衙門、雖五品官、及五品以下官經筵不係講官者、俱穿青綠錦繡。遇有吉禮、止許穿紅布絨褐品官花樣。照依品級、公侯駙馬伯、麒麟白澤、文官一品仙鶴、二品錦鷄、三品孔雀、四品雲雁、五品白鸞、六品鷺鷥、七品鴻雁、八品黃鸞、九品鸛鷄、雜職官練鵲、風憲官獬廌。武官、一品二品獅子、三品四品虎豹、五品熊羆、六品七品彪、八品犀牛、九品海馬、不許混同穿用。錦衣衛指揮侍衛者、得衣麒麟

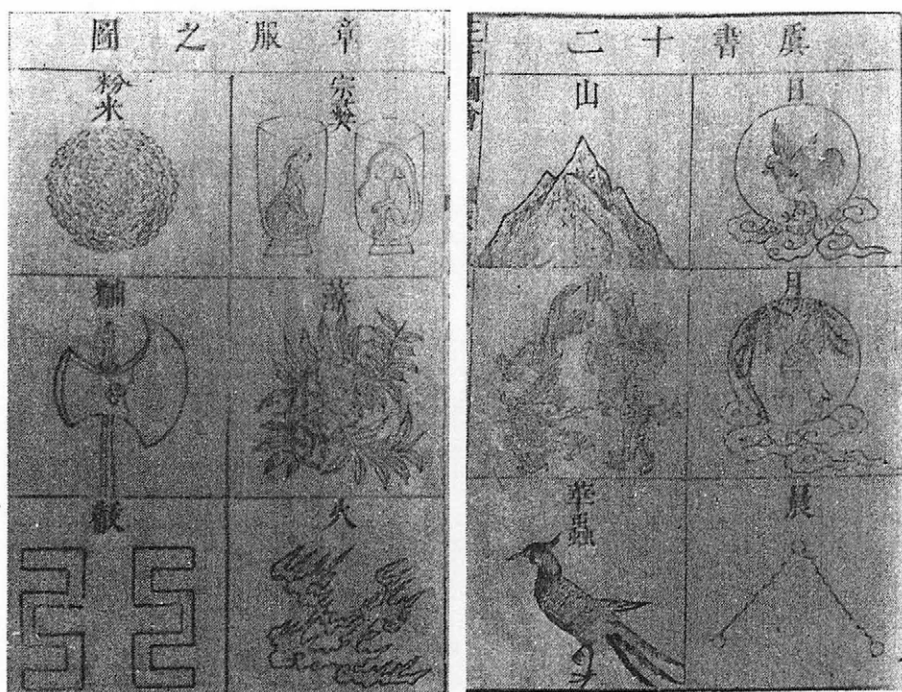
服色。其餘帶俸、及不係侍衛人員、及千百戶等官、雖係侍衛、俱不許僭用。

という禁令がでていますが、これによつて服色と品官の花様がわかる。大紅紵絲紗羅服は、四品以上の官と、五品官の一部許された者に限られるのである。また品官の花様とは、文武官等が常服につける品級をあらわす図柄で、清朝の服制で補子にあたる。秀吉に贈られた常服の胸背麒麟とあるのがその花様を指したもので、右に掲げた大明会典の記事では麒麟白沢は公侯駙馬伯の用いる図柄である。白沢も神獸で、大明会典では品官の花様は洪武二十六年に定まつたとなつてゐる。

大紅の麒麟の花様の常服を頒賜したということは、公侯駙馬伯と同格の扱いをしたというように考えてよい。この点で誥命の底簿が公侯伯と同じ仁義礼智字である点と符合する。

次に注目されるのは皮弁冠一副とある所に、七旒皂縹紗皮弁冠一頂、また服に五章絹地紗皮弁服一套とあることである。まず冠については、皮弁冠というものは鹿皮で作った冠で、皂はくろ、縹紗は細かいしわのある絹織物である。七旒というのは、冠の前後に垂れるかざりが七つあることを意味する。本来もっとも正式な袞冕の服の冕冠の前後についているかざりが旒で、皇帝は前後十二旒、旒ごとに五采の玉が十二珠ついており、皇太子は九旒、九玉、親王も同じ、そして七旒の冠は郡王に用いる。

そこで郡王の袞冕の服に注意してみると、青衣縹裳五章とあり、



挿圖 3 十二章の圖 (三才圖會)

青衣纁裳五章とは、青衣に粉米・藻・宗彝の三章，纁裳に黼黻の二章が織ってあるものである。

皇帝十二章、皇太子、親王九章と相応する（挿図3）。従って常服の花様の麒麟が公侯駙馬伯の図柄であることも関連させて考えると、皮弁服は郡王に準ずるものを頒賜してきたのではないかと思われる。

皮弁服の項に書かれている内わけでは、大紅素は、常服の大紅織金と違って、金糸などの織り込まれていない無地のものを指しているのであろう。

素白中単一件とある中単はしたぎのことで、中衣や汗衫の名もあるが会典にみえる服制ではいずれも中単ででている。郡王皮弁服では

中單以素紗爲之、如深衣制。紅領標撰裾、領織黻文九。

と書いている。地は無地の白なので素白としたのであろう。

次に纁色素前後裳一件とあるのはいわゆる纁裳で、うすあか色の腰から下につける下着である。

紅裳如冕服内裳制、但不織章數。

としており、冕服の項では

纁裳四章、織藻粉米黼黻各二、前三幅、後四幅、不相屬、共腰有襷積、本色緯楊。

とされている。この詳細な点は後でふれる。

次の纁色素蔽膝一件玉鈎全とある蔽膝は、

蔽膝隨裳色、本色縁、有紉施于縫中、其上玉鈎二。

と書いているものにあたり、ひざかけである。裳色に随うと

あるから纁色になるわけである。紃ヒョウはまるうちのひもで、縫目の中を通してあり、それに玉鉤がついている。玉鉤全とはそのことである。

纁色粧花錦綬一件、金鈎玉打璫全とは、綬、即ちひざかけのひもで、それが纁色の花のかざりもようの錦でできたものである。会典では

大帯、大綬、鞆、俱如冕服内制。

とあって、大帯、鞆と共に冕服と同じであるとしている。袞冕の制では

大綬四采、赤白纁緑纁、質小綬三采、間施二玉環。皆織成。

とある。これが纁色粧花錦にあたるものかどうかは判断できない。

紅白素大帯一條は袞冕の制に

大帯、素表朱裏、在腰及垂皆有緯。上緯以朱、下緯以綠。紐約用

青組。

とあるもの、大紅素紵絲烏一雙襪全は

鞆、皆赤色、烏用黒鈎純黒飾烏首。

とあるものに当る筈である。

服制の記述は本来抽象的な表現で、それを具体的に理解することは困難である。以上のべた所も推定が多く、果して正しく理解できたかどうか問題の点もあるであろう。ところが、この時に渡来した明服と思われるものが、現在京都の妙法院に伝っているのである。それで、そのことについて、先に少しふれて置きたい。

豊臣秀吉を日本国王に封ずる誥命について（大庭）

妙法院の龍華蔵という蔵には豊臣秀吉の遺愛の品が伝っている。

これは本来豊国廟にあったものだが、廟が取りつぶされ、元和二年に徳川家康から妙法院に寄せられたものである。品目は衣服、武器、文具、茶道具、文書等に及ぶが、その大半は最近点検調査が始まったばかりで冠一点その他が展示されているにとどまる。従ってその詳細な研究は、調査結果の公表を待たなければならないが、幸なことに天保三年に、時の門跡の令旨を奉じて大僧都真静の序、日吉神社社司祝部希聲の跋のついた、呉景文、岡本豊彦の手になる「豊公遺宝図略」という図録が妙法院から出版されている。この図録は二巻にわかれ、下巻の最後に「朝鮮国王李松書簡并貢物目錄」以下「朝鮮王冠」「同玉佩」「同衣服」として衣八領、裳二枚、脚絆一雙、履一兩の図が出ている。真静の序においても朝鮮の文物と考えられているし、現在妙法院での所伝もそのようになっていく。「図略」にのせている朝鮮国王の書簡は、万曆十八年三月附で、国王李松から日本国王殿下即ち秀吉宛に來たものであって、後に別幅がついているが、その中には布はあるが衣裳はなく、図録より察する所では明服とみて間違いないであろう。

この図録にある衣裳がどれだけ現存するかは現在の調査が終了しなければわからないが、げんにこの朝鮮国王書簡は宮内庁書陵部にあると思われ、従って天保以降の移動はあるものと考えなければならぬ。今その中で確実にそれと比定できるもの、図録から逆に推定できるもの、理解が困難なものを順次略述し、将来の精査の機会

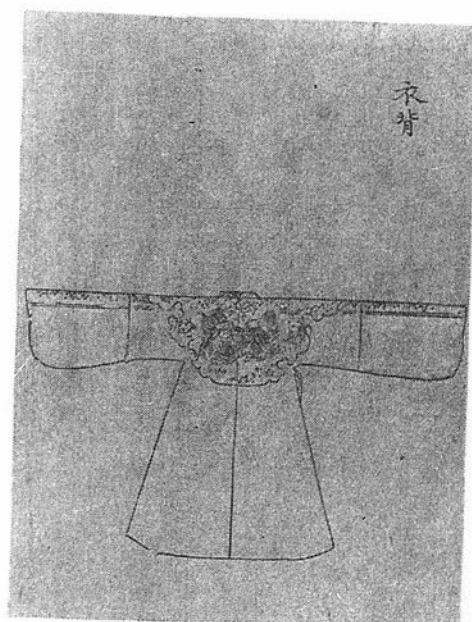


插圖 4-2

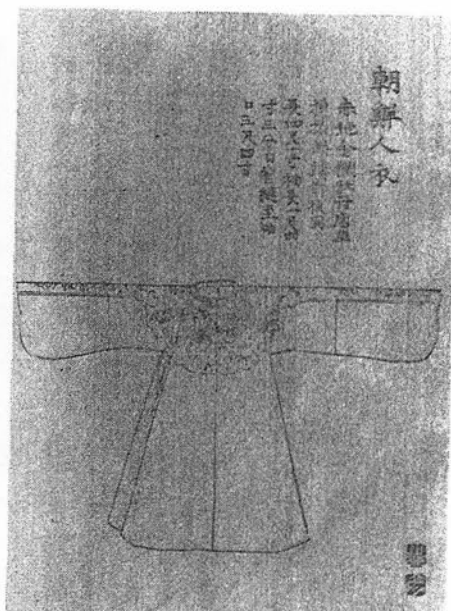


插圖 4-1

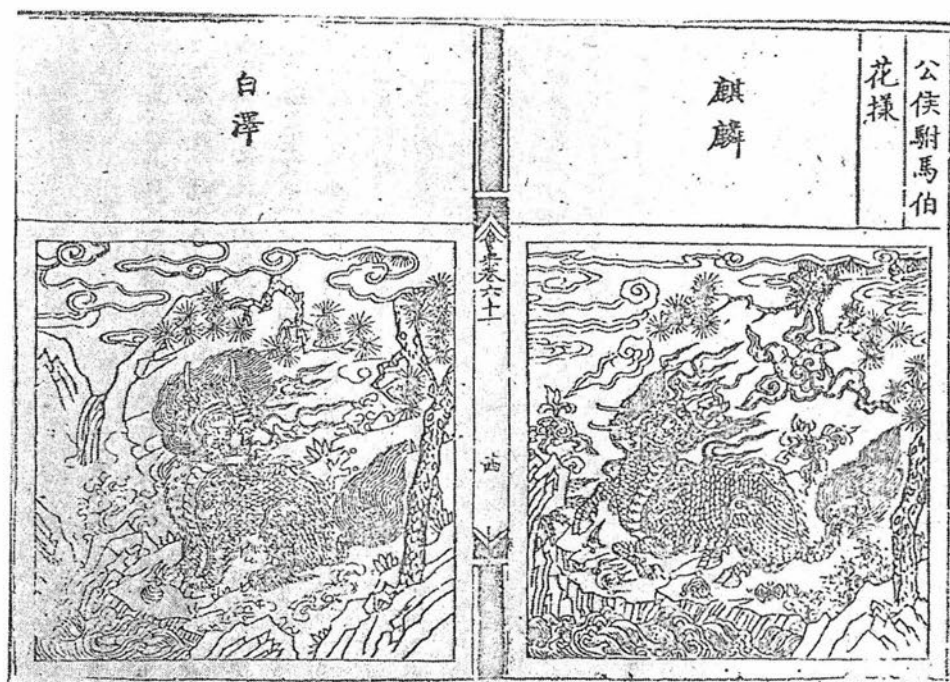
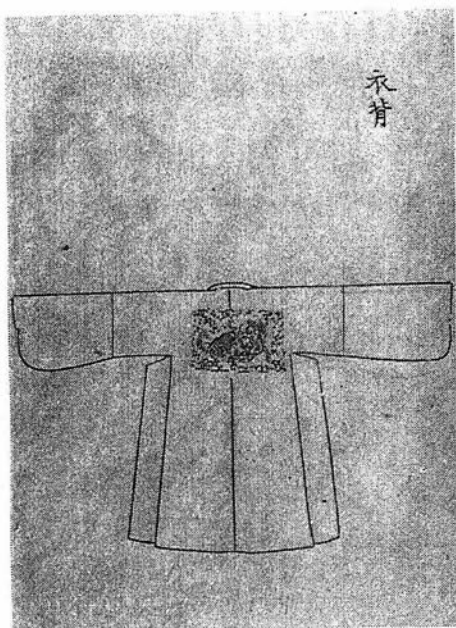
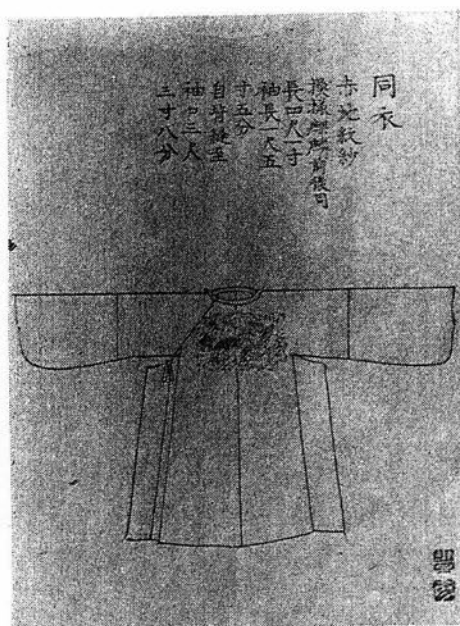


插圖 5



挿圖 6-2



挿圖 6-1

を待ちたいと思う。

A まず正面が第一六丁裏、背面が第一七丁表にでている服がある。（挿図4）これは岡本豊彦の絵で、説明には「赤地金欄牡丹唐草。模様麒麟前後同。長四尺一寸、袖一尺四寸三分。自背縫至袖口三尺四寸。」とある。これは前後すなわち胸背に麒麟の模様があり、赤地金欄とあるから大紅織金に相当する。従って別幅の常服羅一套の最初にある大紅織金胸背麒麟円領に該当するものと思う。胸背の模様は豊彦の簡単なスケッチで細かい所まではよくわからないが、大明会典卷六一の「公侯附馬伯花様」の麒麟白沢（挿図5）によく似ているように思われ、図略の説明では模様麒麟前後同じとあるけれども、背面の方は白沢であるように見える。

B 正面が第一七丁裏、背面が第一八丁表にでている服（挿図6）は、説明には「赤地紋紗。模様麒麟前後同。長四尺一寸、袖長一尺五寸五分、自背縫至袖口三尺三寸八分」とある。Aと同じく麒麟の模様がついているが、Aが肩から袖にかけて模様があるのに対して胸背の部分に四角く模様があるだけで、会典に所謂「花様」、清の服制でいえば補子がついている姿になっている。胸背共に同様の図柄で、会典にかかげた花様の麒麟とは動物の頭が逆側にあり、びつたり符合する図が見当らない。これには金糸が入っていない点から考えて、大紅素皮弁服に比定すべきであろうか。

C 正面が第二〇丁裏、背面が第二一丁表にでている服（挿図7）で、豊彦の絵、説明に「赤地雲地紋、模様龍、前後同。長四尺三寸

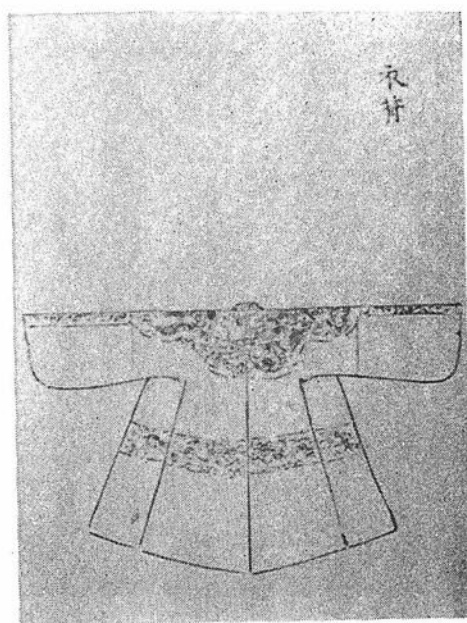


插圖 7-2

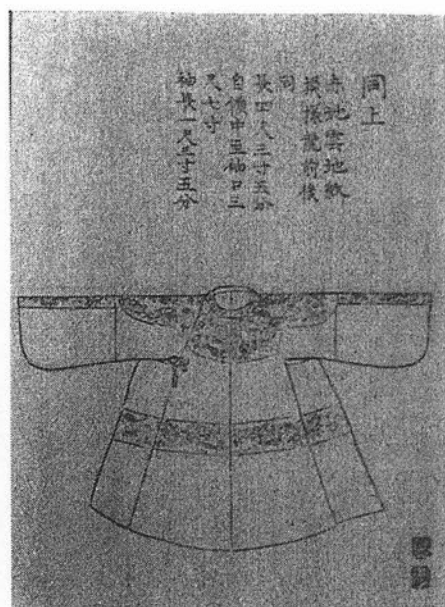


插圖 7-1

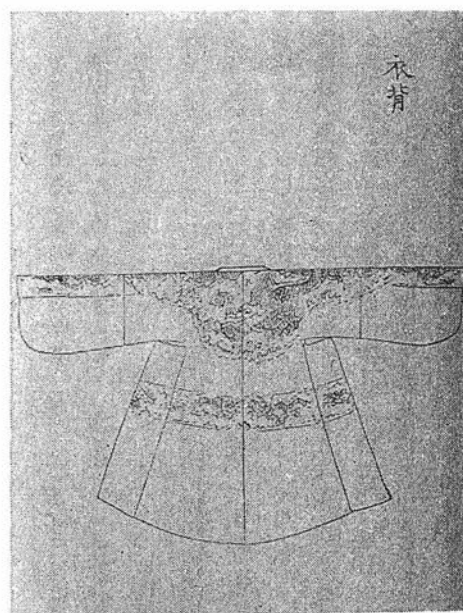


插圖 8-2

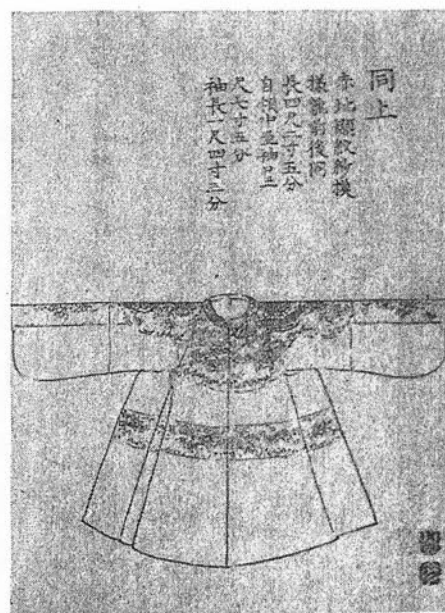


插圖 8-1

五分、自領中至袖口三尺七寸、袖長一尺三寸五分」とある。

D 正面が第二丁裏、背面が第二丁表にでている服(挿図8)と同じく豊彦の絵。説明には「赤地頭紋紗、模様龍、前後同。長四尺二寸五分、自領中至袖口三尺七寸五分。袖長一尺四寸三分。」とある。

C・Dは共に地文を異にするほかは色は赤、模様は龍と同じである。郡王が龍文の衣服を着る場合があり得るかと考えてみると、郡王の常服の制のなかにあることがわかった。会典の郡王の常服は、永楽三年の定として冠袍帶靴俱に親王に同じとし、親王の常服の制を見ると東宮に同じとしている。従って皇太子冠服の中の常服が、とりもなおさず郡王の常服ということになる。そこには

冠、烏紗折角向上巾。袍赤色盤領窄袖。前後及兩肩各金織蟠龍一、帶用玉。靴皮爲之。

と記しており、冠の折角向上巾の後に

亦名翼善冠、親郡王及世子俱同。

と注して、郡王も同じであることがここでもわかるが、袍は赤色で盤領、即ちまるえり、窄袖は俗にいう、つつそでであって、前後と兩肩に金織の蟠龍があるというのだから、ほぼ豊彦の図の通りといえるだろう。そうするとC・Dは常服であるということが推定される。そこで逆にC、Dを勅諭別幅中の常服羅一套の中にある青裾襖一件と縁貼裏一件にあてて理解してよいのではないかと思う。

常服の内わけをこのように考えてみると、後にある皮弁服に対する冠が皮弁冠であるから、常服に対する冠が、別幅の初にある紗帽にあたるであろう。従って皇太子常服の冠は烏紗折角向上巾、又の名翼善冠がこの紗帽にあたるのかどうかという問題になる。烏紗は黒い紗であろうから紗帽と表現することはできるであろう。その形は、冠については皇帝の常服も同じで

冠、以烏紗冒之。折角向上今名翼善冠。

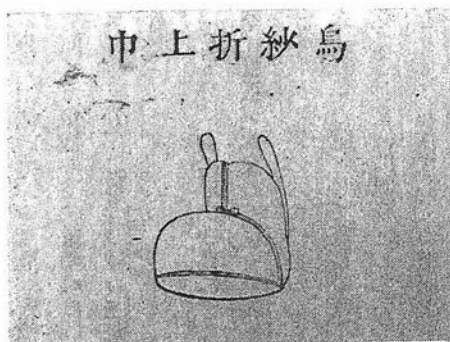
となっており、その図は三才図会によると挿図9のような形である。ところが、別幅には

紗帽一頂展角全

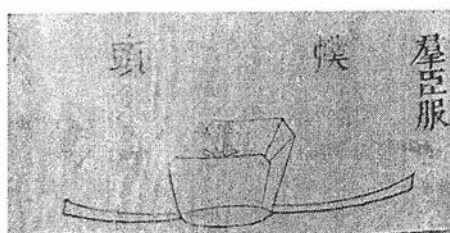
となっている。展はのべる、ひろげるの意味であるから、翼善冠という折角向上とこの展角とは意味する所が異なっていると見なければならぬ。展角とある冠を会典の服制の中をさがしてみると、文武官の公服のところに

幘頭、用漆紗二等、展角各長一尺二寸。

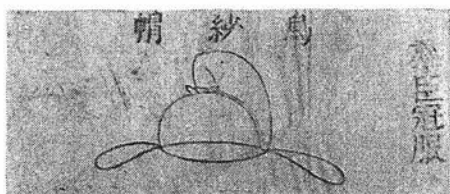
とあるものを見出す。幘頭は三才図会によれば挿図10のような形であるが、恐らく展角の紗帽というのは大阪市の豊国神社に蔵する豊臣秀吉像がかむっている冠ではないかと思う(挿図11)。これは三才図会の羣臣冠服中に烏紗帽とあるもの(挿図12)で、恐らく、後述の上杉神社所蔵の明服に附属する冠も同じものであろう(第五図の1・2)。現在鉄製の骨だけ残っている燕尾といわれている部分(第五図の2)が展角で、烏紗で冒って秀吉の冠のように横に張っ



挿圖 9



挿圖 10



挿圖 12



挿圖 11

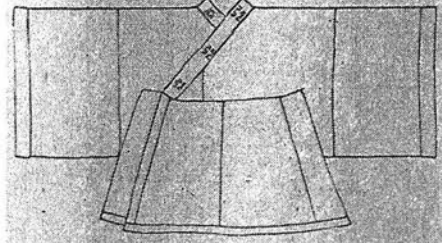
た形が展角の展と称する所以であろう。そうとすれば会典の烏紗折角向上巾とは形が違ったものとなり、三才図会にいう烏紗帽にあたるものであろう(挿図12)。そこで冠は郡王の常服の規定とは異った下級のものが来ていたと考えられる。

ついでに金箱犀角帯一条とあるものにもふれておこう。これも恐らく常服に附属したものの筈である。というわけは、皮弁服の中には紅白素大帯が附いているからである。そうであるとすれば、皇太子の常服、即ち郡王の常服では帯は玉を用うという規定とは異なることになる。金箱は犀の周囲を金で囲ったことをいうのであろうが、革帯に犀角を用いるのは文武官冠服の朝服の項で二品官のところに出現する。従って紗帽と帯とは甚だしく郡王の規定をはずれ、臣下の着用するものになっている。

再び妙法院の豊公遺宝図略にもどうだろう。

E 第二三丁裏にでている下着(挿図13)。豊彦の絵で、説明には「薄柿色無紋紗、襟赤、両己相背の文有り。長四尺四寸、袖長三尺二寸五分、領中より袖口に至る四尺一寸」としている。襟が赤で、両己相背の文があるというのが大きな特色である。両己相背の文というのは、図を見ると理解できるよ

同衣
薄持色無紋
紗縹赤有兩
已相背之文
長四尺四寸
袖長三尺寸
五分
自領中至袖口
四尺一寸



器

挿圖 13

うに、己という字のような模様が背中あわせになっているという意味である。これは岡本豊彦か、或いは説明を別人が書いたとすればその人が、知らなかったからそう表現したまでで、この模様が敲文である（挿図3参照）。そうすると、郡王皮弁服の中単の所に

中単、素紗を以て之をつくる。深衣の制の如し。紅の領、標襖裾。領に敲文九を織る。

と書いてあるのにぴったり適合するから、Eは皮弁服の中の素白中単一件とあるものに相当する。

F 第二三丁表にでている下着（挿図14の1）。豊彦の絵で、説明には「萌黄地無紋、襟白、長二尺五寸五分、自領中至袖口四尺、袖長六寸七分、襷前二十五、後二十四」とある。この図は大明会典

豊臣秀吉を日本国王に封ずる詔命について（大庭）

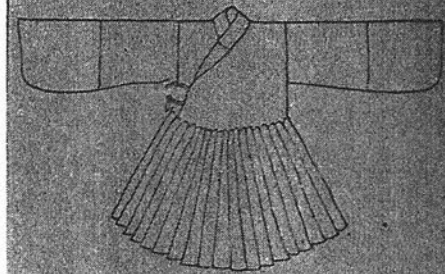
前圖

深衣圖



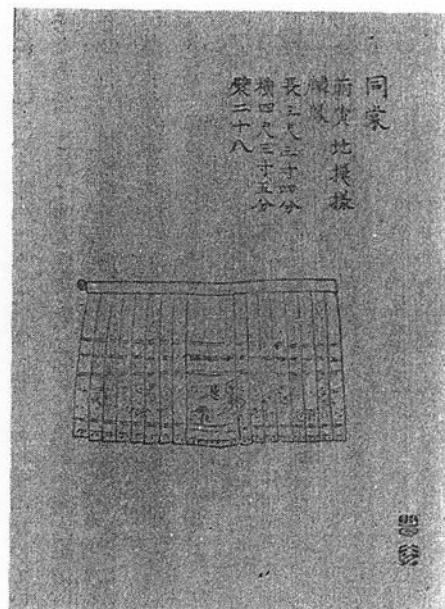
挿圖 14-2

同衣
萌黄地無紋
襟白
長二尺五寸五分
袖長六寸七分
自領中至袖口
四尺一寸
襷前二十五
後二十四

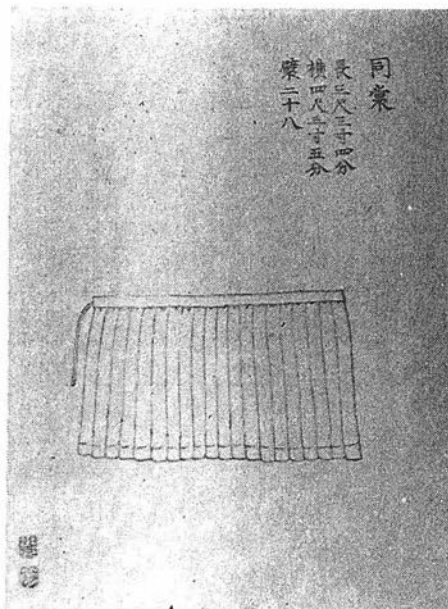


器

挿圖 14-1



挿圖 15



挿圖 16

の巻六〇に出ていた深衣図(挿図14の2)とよく似ているから、単として用いられたに違いないが、別幅の中のどの項にみあうかはわからない。

G 第二二丁裏に出ていた裳(挿図15)。

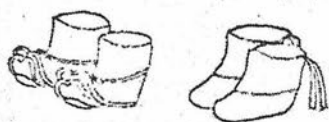
H 第二四丁表に出ていた裳(挿図16)。

いずれも豊彦の絵。Gは説明に「萌黄地、模様麟鳳、長三尺三寸四分、横四尺三寸五分。裳二十八」とあり、Hは「長三尺三寸四分、横四尺三寸五分、裳二十八」とある。裳は、別幅皮弁服の項に繡色素前後裳一件とあるが、会典では模様の事が書いてない。Gの麟鳳模様の裳がそれに当るかどうか、猶問題が残るようで決定し兼ねる。Gの裳は現在竜華蔵に陳列されている。

I 第二四丁裏にでている脚絆、履二両(挿図17)。

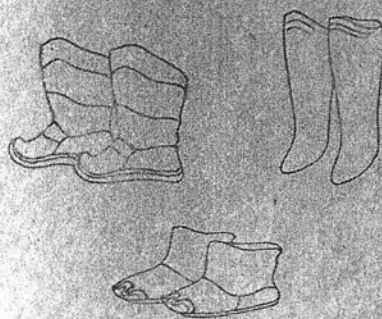
具景文の絵。別幅の中ではきものに関して名前が出ているのは、皮弁服の最後にある大紅素紵絲烏一雙襪全とあるものである。これは先にのべたように、大帯、大綬と共に冕服の制と同じものを用いることになっており、冕服の制では襪も烏も皆赤色、烏は黒鉤純黒を用って烏首を飾るとある。これは具体的には文意がわからないが、赤地に黒の飾りがついているというところであろう。大明会典巻六〇の皇帝冕服の図にみえる襪烏図、(図18)皮弁服の図にみえる襪烏図(挿図19)、常服の図にみえる靴図(挿図20)と比較すると、景文の図の右にえがかれた脚絆とあるものは皮弁服の襪に、下にえがかれた履は冕服図の烏に、左にえがかれた履は常服図の靴にあた

戦鳥圖



挿圖 18

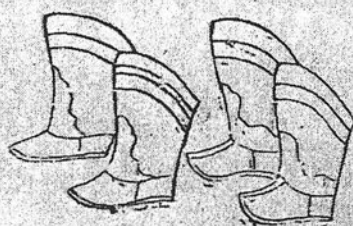
脚絆
役二兩



圖

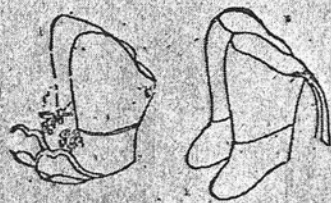
挿圖 17

靴圖



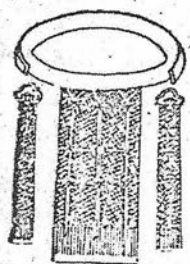
挿圖 20

戦鳥圖

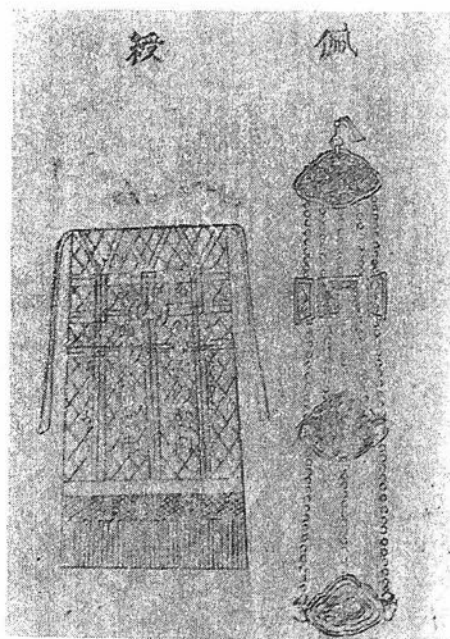


挿圖 19

佩綬上繫革帶圖

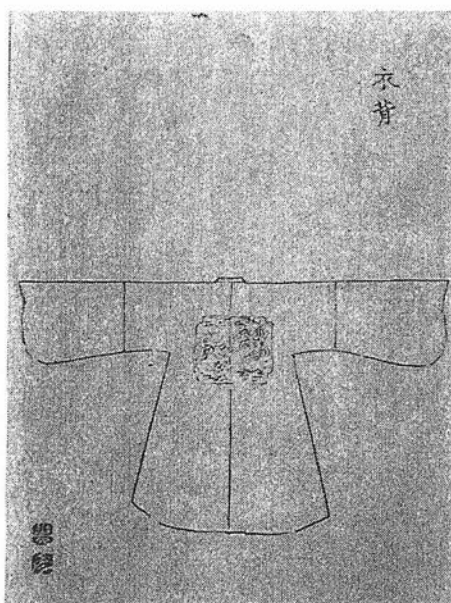


挿圖 24



挿圖 23

衣背



挿圖 25-2

同衣
赤地連華唐
草金襴模樣
鳳皇
長三尺九寸
袖長一尺三寸
五分
自背縫至袖口
三尺四寸三分



挿圖 25-1

玉佩、如冕服内制、但無雲龍文。有小綬四采以副之。

とある。そこで冕服の制をみると

玉佩、如親王佩制。珩以下璩雲龍文。上有金鈎、以小綬四采副之。四采赤白纁綠纁質。

とある。珩は佩の上部にある玉であり、璩は玉に浮彫をほどこすことで、雲龍文を彫りつけるという意味である。皮弁服の玉佩はこの文がないという但書がついているから、この玉佩は冕服の制のものである。別幅の中では纁色粧花錦綬一件金鈎玉玕璫全とある但書の部分がこれにあたるのであろう。大明会典の皇帝武弁服の図に佩綬上繫革帶図（挿図24）があるが、左右に佩があり、中央に綬があり、これが一括して革帶に附いている。玉佩も陳列されている。

Ⅰ 正面が第一八丁裏、背面が第一九丁表にえがかれている服。

（挿図25）

岡本豊彦の絵。説明には「赤地蓮華唐草金襴、模様鳳皇、長三尺九寸、袖長一尺三寸五分、自背縫至袖口三尺四寸三分。」とある。胸背に四角い花様があり、尾の長い鳥が二羽飛び違っている姿がでている。鳥の図柄の花様は文官に用いられるが、鳳凰と称する図柄はないし、この絵に見られる図柄に似たものもない。従ってこの袍は何の為のものか判断がつかないが、図柄の尾の長い鳥についてだけいえば、郡王妃の冠服の大衫霞帔の中に、金縷の雲霞翟文ということが書いてある。翟は尾の長いきじであるが、関係はないものであろうか。この袍は他のが袍がすべて四尺ないし四尺三寸五分のた



挿圖 26-2



挿圖 26-1

けがあるのに、三尺九寸の長しかないの、或いは郡王妃と関係があるものかも知れない。別幅の中には該当する品名はない。

M 正面が一九丁裏、背面が第二十丁表にある服(挿図26)。

豊彦の絵。説明に「赤地獅子雲紋、長四尺、袖長一尺三寸、自領中至袖口三尺六寸五分」とある。この袍は、C・Dと同様肩から袖にかけてと袍の胴まわりとに模様が入っており、胸背にある動物のスケッチは会典花様の図の武官一品の獅子(挿図27)と似ている。これも別幅と比定する項目がなく、判断できない服である。

以上対比の結果、「豊公遺宝図略」の中には見出せなかった別幅記載の品物は、紗帽、金箱犀角帯、玉圭、緋色素蔽膝、紅白素大帯、丹礬紅平羅鎗金夾包袱、などである。



挿図 27

(二) 下将に対する割付

神宗実録の万曆二十三年正月乙酉(十二日)の記事に左のようなことがある。

兵部石星題、關白具表乞封

上特准封爲日本國王。查隆慶年間初封順義王舊例、其頭目効順者、授以龍虎將軍等職、朵顏三衛頭目見各授都督等官、今平秀吉既受 皇上錫封則行長諸人即爲 天朝臣子。恭候旨、下將豐臣行長、豐臣秀家、豐臣長盛、豐臣三成、豐臣吉繼、豐臣家康、豐臣秀保各授都督僉事。小西飛間關萬里納款、仍應加賞資、以旌其勞。其日本禪師僧玄蘇、應給衣帽等項。本部俱于京營、犒賞銀內酌給。奉旨如議行。

これは兵部尚書石星の題本に、秀吉が日本國王に封ぜられたに付いては、隆慶年間に「^{アムギヤハン}」を順義王に封建した時の例に、その手下の頭目に龍虎將軍の職や、都督などの官を授けたことがある。今秀吉が既に皇上の錫封を受けた以上は、行長ら諸人も即ち天朝の臣子であるから、下將豊臣行長等に都督僉事の官を授けたく、小西飛は万里の遠きを歟を納め努力したから賞資を加えてその労をあらわし、日本禪師、僧玄蘇には衣帽などを給したい。それについては兵部が京營と共に犒賞銀の費目の中から適宜事情を酌んで給付いたしたいとあり、皇帝の承認を得て建議の通りに行なうことになったというのである。

この石星の題本が実現したことは、まず日本の文献の上では先にひいた本朝通鑑に例証を得ること、明使が日本の諸將に対して冠服五十余具を授け、其の位階に随つて之を用うべしといったとあることでもわかるのであるが、今この時の資料の一部が残っている。その最も整っているのは上杉景勝の場合である。山形県米沢市の

上杉神社には、上杉家歴代の宝物が極めて良好な状態において保存されているが、その中に「赤地雲文緞子竜文刻糸飾付明服 付明兵部簡」という名称で重要文化財に指定されている明の衣服と文書がある。これがいまとりあげている資料である。重要文化財指定の重点は衣服にあつて文書は副次的な取扱いであるが、我々はまず文書か

ら考えてゆくべきであろう。
この文書はたて一〇五・五厘、横八九厘の一枚摺の唐紙で、中に幅四厘のわくが刷ってあり、わくの内のりはたて九〇・八厘に横七五厘である。その文章は次の通りである。

兵部爲欽奉

聖諭事照得頃因關白具表乞封

皇上嘉其恭順 特准封爲日本國王已足以遠慰內附之誠永堅外藩之願矣但關白既受

皇上錫封則行長諸人卽爲

天朝臣子似應酌議量授官職令彼共戴

天恩永爲臣屬恭候

命下將豐臣景勝授都督同知官職以示獎勵擬合給劄爲此合劄本官遵照劄內事理永堅恭順輔導國王恪遵天朝約束不得他有別求不得再犯朝鮮不得擾掠沿海各保富貴共享太平一有背違

王章不宥須至劄付者

右劄付都督同知豐臣景勝准此

萬曆貳拾參年貳月

初四日給

(朱書)

劄付 押

最後の年号の上に印が黔されているが印文は不明。初四の二字は別筆朱の書入れ、最後の割付の二字と万曆、年、月、日給の字は印字かと思われ、押字がある。この文中に用いられている語句は先に引用した正月乙酉の兵部尚書石星の題本と甚だ類似していて、題准の結果発布されたものであることは疑う余地がない。また最後の方の本官遵照割内事理以下の文は、秀吉に対する勅諭の後の方に出てくる原約三事のうちの二事が強調され、「一も背違有れば王章有さざらん」という句は、同じく勅諭の「天驕孔に敵たり、王章赫たるあり欽めよや」という結びと同様威嚇の語である。もっともこういう書き方は程度の差こそあれ沈惟敬あての勅諭にも見られるところであって、必ずしも相手が倭国人だから書いたとは限らない。

次にこの文書の形式について考えてみると、最後に大きく割付とあることを始めとして文中にもその文字があり、明清時代に用いられた割付という形式の文書で、六部成語の吏部に

割付、上官派委員辦事、皆付割文、此文即名割。

とあるものに当り上級官より下級官に与える下達文書の一つである。その基本の書式については、大明会典六六、礼部三四の奏啓題本格式の中に割付式があつて、次のようになっている。

割付式

某軍都督府爲某事、云云、合下仰照驗云云、須至割付者

右割付某衛指揮司准此

洪武 印
某事 年 月 日

豊臣秀吉を日本国王に封ずる詔命について（大庭）

左都督押 同知都督押 僉都督押
割付 右都督押 同知都督押 僉都督押

この例は某軍都督府から某衛指揮司へあてたものであるが、これが六部尚書の場合はどうなるかといえ、同じく会典にひきつづいて

六部割付各衙門文移同

割付尚書押 侍郎押
侍郎押 侍郎押

となつていて、最後の押署の官が変わるだけで文章の形式は同じことである。景勝宛の割付は最初に「兵部爲欽奉聖諭事」とあり、これが割付式の「某軍都督府爲某事」に相当する。ただ聖諭の字を抬頭する爲に趣きを異にするにすぎない。又割付式の「合下仰照驗」は「擬合給割、爲此合割、本官遵照割内事理」が相応じ、文末の「須至割付者」は共通し、「右割付某々准此」という部分もその通りである。年号の所に印を押す点も割付式の通りである。日附を書入れること、日付の下に「給」の字があることは共に割付式には書いていない。そして、最後の割付の字の下には、六部の場合は尚書が押署するきまりである。そうすると、この割付は兵部の発給だから、押署は兵部尚書でなければならない。従つてここに書かれた押字は、兵部尚書石星のものであると推定される。侍郎の押署は略されていない。

この割付は当然神宗実録にある小西行長、宇喜田秀家、増田長

盛、石田三成、大谷吉継、徳川家康等にも、その他の部将にも到来した筈であるが、今日それが確認できるのは毛利輝元にあて都督同知を授ける旨を書いたものが山口県防府市の毛利博物館に^⑧、前田玄以にあてて都督同知を授ける旨を書いたものの模本が東大史料編纂所にある^⑨。それらはいずれも官名等が一・二字異なるだけであるので、文章は一一あげず、一括して写真掲げておいた。(第四図)

次に注目されるのは、僧玄蘇にあてて出された割付の写しの存在することである。それは平戸市の松浦史料博物館に所蔵されている^⑩。たて七〇・五厘、横五〇厘、匡郭の内は四八厘に四一厘、匡郭の幅二厘で、上杉景勝等のものに較べると三分の二の大きさである。その文章は殆んど同じであるが、割文の後から二行目に三条の禁制を述べたあとに「各保富貴」とある所が、玄蘇宛のものに限り「各保職位」となっている。これは玄蘇が僧侶である所から富貴を保ちという表現を避けたのか、又は割付の大きさが違っていることで暗示されるように、身分の差がある為に職位の字を用いたのか、恐らく両方の意味を兼ねた処置であると思われる。この割付を以て玄蘇は日本本光禪師を授けられた。

玄蘇宛の割付の本紙は、かつて対馬の西山寺にあって、天明元年に臨写したものが平戸の模本であるが、本紙は失われて今は存しない^⑪。

もっともこの文章は玄蘇の文集仙巢稿には採録されており、仙巢稿にもとずいて伊藤威山が隣交徴書に「賜玄蘇本光禪師号并蜀錦

伽梨二割」という題で載せている。但し伊藤威山はこの文の作者を神宗と考えているのは誤まりであり、句点も違っている。また標題に蜀錦伽梨、蜀紅錦の僧衣を賜わるという句が入っていることも誤まりで、確かにこの時玄蘇は僧衣を得たが、そのことは仙巢稿にあって割付の文中にはない。なおその僧衣は西山寺に現存している^⑫。

さて万曆二十三年二月四日附を以て秀吉の配下の将は都督同知などの官を授けられ、文祿四年(万曆二十四年)に来朝した明使楊方亨、沈惟敬よりそれぞれ明服を贈られた。その時の衣類その他をよく保存しているのが先に述べた通り米沢市の上杉神社である。

この明服が重要文化財に指定されている内容は、明服と兵部の割付のほかに冠一頭、石帯一条、靴一双、下着一領を含む。先にもふれたように、重文指定は服装が中心で割付は附属した扱いになっているが、本来は都督同知の任官の通知である割付があって、それに見合った服装を贈ってきたことは申すまでもなく、従って割付には服装の事は全くふれず、明服の送り状ではない。

この明服並に附属品の写真は『上杉家伝来衣裳』^⑬の中に収録され、東京国立文化財研究所の神谷栄子氏の解説がついている。本稿には上杉神社の好意ある許可のもとに、神谷氏をわずらわして同研究所蔵フィルムによる写真を掲載することができた。以下神谷氏の解説を参考にしながら考察をすすめたい。

1 赤地雲文緞子竜文刻糸飾付明服(第五図—1・2)

地はたて糸、よこ糸共に赤色に先染した雲文緞子で、胸背にたて

三三・五センチ、横三六センチの竜文刻糸（綴織）の飾がついている（図五—3）。丈一三五センチ、衿一一三センチ、袖幅四三センチ、袖口一九センチである。

この服の形態は先に述べたBの服の形態に酷似している。都督同知は従一品相当の武官である。本来の規定の花様からいえば獅子でなければならぬが、龍の模様になっている。龍の模様のついた衣、すなわち蟒衣は、先にひいた大明会典卷六一の嘉靖十六年題准に

今後在京在外文武官員、除本等品級服色及特賜外、不許擅用蟒衣飛魚斗牛等項。

とあるように、特賜される場合があるようであるが、この場合はどういう次第で龍の花様がついた衣服が来たか明らかでない。なお同じ題准にもあるが、明史輿服志にもあるように、四品以上の官は紵絲或いは紗羅絹の緋袍を着ることができ、その制は盤領右衽であるが、この服もそうになっている。

2 下着（第五図—4・5）

経糸・緯糸ともに萌黄色に先染した雲文綴子で、1の服の下に着るものである。襟にかけた裂は白の平絹である。

これは色が萌黄色であることと、襟から袖の形は前掲F（挿図14）に似、下半身は前掲E（挿図13）に似ている。いずれにしても中単と称してよいだろう。

3 冠（第六図—1）

黒革製でその上に薄い裂がかぶせてある。高さ三〇センチ、幅一

豊臣秀吉を日本国王に封ずる詔命について（大庭）

七センチ、奥行一六センチ、燕尾は鉄製の骨のみで長径一六センチ、短径八・五センチである。（第六図—2）

この冠は先に述べた通り、燕尾といわれている部分を横に張り出した烏紗帽で、秀吉像（挿図11）のように復元されるべきものである。かぶせてある薄い裂は烏紗であるのに違いない。冠の奥行が展角の長径と同じ長さである。

4 石帯（第六図—3・4）

石は角製の透彫で麒麟模様、巾五センチ、全長一四五センチ。

透彫の模様が美しい。角製であるとすれば秀吉の所でのべたように犀角、二品官のものにあたる。

5 靴（第六図—5）



挿図 28

黒革製、上部は紺木綿の裂、靴の底は刺子になっている。高さ四〇センチ、底の長さ二九センチ。

（の所で述べたように、大明会典の靴の図（挿図20）と酷

似している。文武官公服の所に「靴は皂を用う」とあり、皇帝や皇太子の常服の所に「靴は皮を以て之を為る」としている。

以上の衣服を検討してみると、盤領右衽（挿図28）の緋袍、烏紗帽、腰帶は角、靴を揃えているから、ほぼ二品官の公服をもたらしたと見るのがよいのではなからうか。

(四) 考 察

豊臣秀吉を日本国王に封ずる誥命、同時に発給された勅諭とその別幅、下将を任命する劄付についてそれぞれ明制に照らしてそれが如何なるものかを検討してきた。そこで今からその結果を総括的に考察してみよう。

まず誥命から明らかにいえることはそれが蕃王を封ずる取扱いに適合し、文官一品と同じ誥軸が用いられ、公侯伯と同じ底簿に記されていることが明らかになった。そして、誥命の文は儀式的であるのに対し、実質的内容は勅諭にもなれていることが認められた。更に勅諭の別幅に載せられている衣裳は、ほぼ公侯伯ないし郡王の皮弁服と常服が支給されているが必ずしも制度通りにととのってはいないことを物語っている。而して、下将達を任命する劄付が発せられ、秀吉を頂点として下将にもそれぞれ格付けをしながら官職をおくり、公服を支給したと見られる。ここにはえがき出された関係は、甚だ類似したものを出されはすまいか。

私は三国志の魏書東夷伝倭人の条にみえる卑弥呼を親魏倭王に封

ずる制書を思い出すのである。それはかつて考察した通り、国内の王ならば冊書を以て封ずる所を、三公九卿を任ずる制書によっていることがまず文官一品と同じ誥軸を用いている点と比較される。次に勅諭の内容は、卑弥呼の使と貢物が到着したことを述べ、それを多とする文に当るであらう。実質的内容が異なるのは、相互の拘り合いの深さが違うから当然のことである。そして、別幅に当るのが絳地交龍錦五匹以下の賜品の目録に相当し、難升米を率善中郎将、牛利を率善校尉に任ずる部分が、下将を任命する劄付に相当すると見られる。蛮夷王を封ずる形式に関する限り、三世紀の魏においても、十六世紀の明においても変りはなく、いわゆる冊封体制の一面をしめしていると考えられる。卑弥呼に対する制書の中に、「汝其れ種人を綏撫し、勉めて孝順を為せ」といい、末尾に賜物を列挙した後、「還り到らば録受し、悉く以て汝の国中の人に示し、国家汝を哀むを知らしめよ」といっているのと、秀吉に対する勅諭の中に「世々爾の土に居り、世々爾の民を統べよ」といい、「六十六島の民、久しく徴調を事とし、本業を離棄す。当に意を撫綏に加え、其の父母妻子をして相完聚するを得しめよ。これ爾の朕が意を仰体する所以にして、上、天心に答うるものなり」といっている言葉を比較すると、蛮国の民を間接的に支配する皇帝の観念も共通してあらわれて誠に興味深いものがある。

なおこれと関連して論じ残していることがある。それは、例えば上杉景勝や毛利輝元は都督同知、前田玄以は都督僉事に任命されて

いるが、都督同知は従一品相当、都督僉事は正二品相当の武官である。従って、万曆会典によれば

、新製、武官誥軸、一品至七品、俱鎧甲葵花引首、抹金軸。

とある誥命が給せられるべきであるのに何故割付が来ているのかという問題である。この理由については私は、(一)下将に対する割付の冒頭に引用した神宗実録の兵部尚書石星の題本に注目したい。その文には「今平秀吉、既に皇上の錫封を受くれば則ち、行長諸人は即ち天朝の臣子たり。恭やしく旨を候がい、下将豊臣行長……各々都督僉事を授けん」といい、更に小西飛に賞賚を功え、玄蘇には衣帽等の項を給すべしとあって、「本部、京営と俱に犒賞銀内より酌給せん」といつている。この「恭やしく旨を候がい」という言葉に端的にあらわれ、更には賞賚や衣帽を兵部と京営の犒賞銀の範囲内から酌給しようという申請でもわかる通り、兵部の判断が大きくはたらいっている。そして「旨を奉じて議の如く行なった」とあるから、兵部が帝の旨を奉じて行なった授官で、割付によって伝達する略式によつたのではあるまいか。もとより内国に適用される制度ではなく、蛮王の下将であるから認められる措置であろう。そうとすればこの処置は、遣唐使判官高階遠成に実効性のない告身が与えられていたのと似たものである。

このように蛮王の封建という角度から極めて興味深い特色が指摘できる。

なお、上杉景勝、毛利輝元の割付の中で、文中及び「右割付云々

豊臣秀吉を日本国王に封する誥命について（大庭）

准此」とある末尾の部分の同知という文字を、別紙を帖って書いてある。これは何故なのか。石星の題本は都督命事としている事を思うと、来日までに一年以上の日子を費やした間に更に沈惟敬らの工作が想像される。又、通常の封建ならば、秀吉の夫人に対し、王妃に封ずる誥命その他がある筈であるが、それは何もない。義満の場合など、夫人にあてた賜物が別幅に多くあるが、秀吉の場合にはない。これは交戦後の封建であるからであろう。

なお、辞令の書式の変遷の上からいえば、任命の辞令と、勅諭と、賜物の目録とがわかれて支給される例は、唐の大中五年洪誓告身^⑨に既に見出される。

二 我が国に現存する明代の誥勅

秀吉を日本国王に封する誥命と、それに関連する文物については、前章にのべた通りであるが、明代の誥勅資料で今日我が国で見ることができると、それに準ずるものについてふれたいと思う。

(イ) 天啓二年某氏誥命零文

まず誥命に関して述べてゆく。文章は完全でない為に不明の部分があるが、明末天啓二年の誥命が東京大学の史料編纂所にある。

その文章を移録してみる。

奉天誥命（篆書織文）

友敦倫于家政時號



恭而誥命
 文獻公家政時說
 白眉拊孺弟之孤一
 如己子視耄兄之疾
 卽其躋介余銘
 潛臺足跡不入城市
 同表正於陳寔里俗
 化其黨爭蓋樹德者
 有年而承前者裕後
 正芽珠顯接踵而上
 青雲北斗中樞昂藏
 而趨玉階士師用眷
 彼隱倫幽閑以相孤
 高成其篤行奉尊謹
 拊孤均顧復之慈恩
 微鳩愛佐解推而無
 吝嫁侄娣以傾衾當
 椿韓之喪明恭承湯
 藥恪炷香以祈復誠
 格神明惟內儀克翼
 乎燕詒故再世而家
 聲光大斯上台海微
 乎鳳綵歷百年而國
 業隆無香以祈復誠

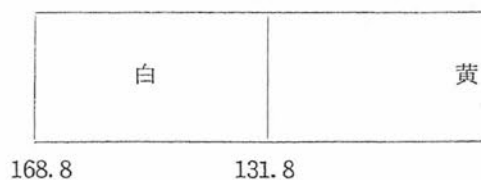
格神明惟內儀克翼
 乎燕詒故再世而家
 聲光大斯上台海微
 乎鳳綵歷百年而國
 業隆無香以祈復誠
 天啓二年 月 日

白眉拊孺弟之孤一
 如己子視耄兄之疾
 卻其歸金逾介節於
 潛臺足跡不入城市
 同表正於陳寔里俗
 化其黨爭蓋樹德者
 有年而承前者裕後
 玉芽珠顯接踵而上
 青雲北斗中樞昂藏
 而趨玉階士師用眷
 彼隱倫幽閑以相孤
 高成其篤行奉尊謹
 拊孤均顧復之慈恩
 微鳩愛佐解推而無
 吝嫁侄娣以傾衾當
 椿韓之喪明恭承湯
 藥恪炷香以祈復誠
 格神明惟內儀克翼
 乎燕詒故再世而家
 聲光大斯上台海微
 乎鳳綵歷百年而國

切断		
赤	白	黄
94.8	57.5	21.4

寵維新是用覃恩加
贈爾爲一品夫人禮
嚴祖廟共歌垂裕之
榮澤庇孫枝彌懋繼
戎之烈沐茲湛渥賁
爾懿靈

天啓二年 月 日 (制誥)
仁字九百十三號 (廣運之寶)



この誥命は記録によれば大阪の富田仙助氏旧藏品で辻善之助博士に贈られたものであるが、それ以前の伝来経過は不明で、改装されて原形は失われている。最初の奉天誥命の織文の部分は次の文には続かず、誥文の最初の部分が失われていることは一見して明らかである。それから五七・五糧の所で地色が白から赤に変るところで切断され、その間が脱けているらしく、地文様は接続しないし、色も五行の順ではない。しかし字体も同じく、字数も行八字であるから同一のものであろう。地色は殆んど褪色し、地文様も鮮明ではないが雲鶴錦である。後から六行目に、「是に覃恩を用って爾に加贈して一品夫人と爲す」という文がある。従って少くとも後半は女性に

豊臣秀吉を日本国王に封する誥命について(大庭)

与えられたものと見なければならぬが、最初の行から「倫を家政に教くし時に白眉と号し、殤弟の孤を拊しては一に己の子の如くす」という句があるから、終始女性のことであるように見え、後掲の例のように、前半に男子、後半にその配偶者というような関係であるとは考えられない。

日附は天啓二年とあるだけで月日は数が書いてないが、ここへ日附を後から加える場合があることは後掲の成化六年の勅命に認められる。またこの誥命の登記の字号、例の割字は、番号は明らかに九百十三号であるが、人偏の文字は、授官の内容が一品である所より推して仁字であろうか。字形の上からは断定をばかるものである。

(四) 嘉靖二十四年王以旂祖父王龍、祖母顧氏誥命(挿図30)

次に嘉靖二十四年十月十一日に王以旂の祖父王龍に資政大夫南京都察院右都御史、祖母の顧氏に夫人を追贈する誥命を家蔵するので紹介したい。この誥命は昭和四十年頃、偶然東京の琳琅閣書店に出たものを購入したのであるが、墨色もやや褪色し、一二破損した部分もあり、全体を我が国で改装したもので、裱装も誥軸もすべて新しい和風のものになっている。縦二八・七糧、横三二六・五糧である。

本文は次の通りである。

奉天誥命

奉

天承運

皇帝制曰朕聞之功崇者

報遠德厚者澤深朕

所以寵嘉大臣而進

命再世者非獨以勤

効功實所以褒世德

也爾贈通議大夫都

察院右副都御史王

龜乃南京都察院右

都御史以旂之祖父

處隱約之地而多抗

行之心孝友在躬禮

教靡貳可以觀爾德

已而俾爾壽康俾爾

昌熾皆天之所以祚

有德者也茲特加贈

爾爲資政大夫南京

都察院右都御史尙

克明猷以章啓佑

青	赤	黄
57.5	126.0	0

制曰詩詠蒸洽祖妣言

歲事有成則祖妣是

享也況土之成宦者

豈無是心哉故推恩

之典以序而進順人

情之極也爾贈淑人

顧氏乃南京都察院

右都御史王以旂之

祖母約己以自持勞

身以立範實貽孫子

肆啓厥家總朕紀綱

股肱王室朕甚嘉之

茲特贈爾爲夫人九

原有知歆此寵命

嘉靖二十四年十月十一日

智字伍百肆拾號

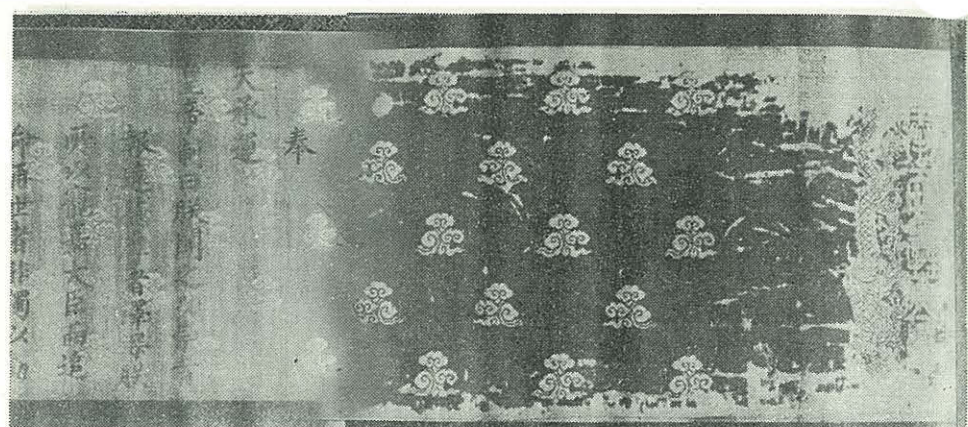
嘉靖三年 月 日造

廣運之寶

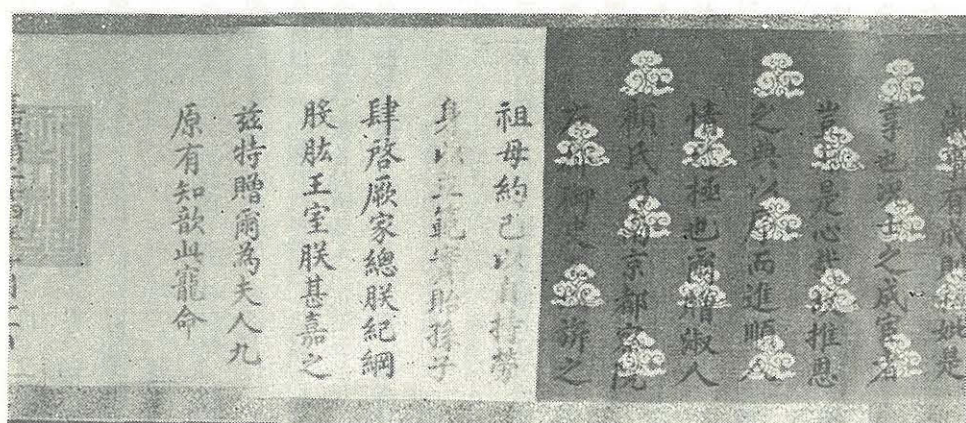
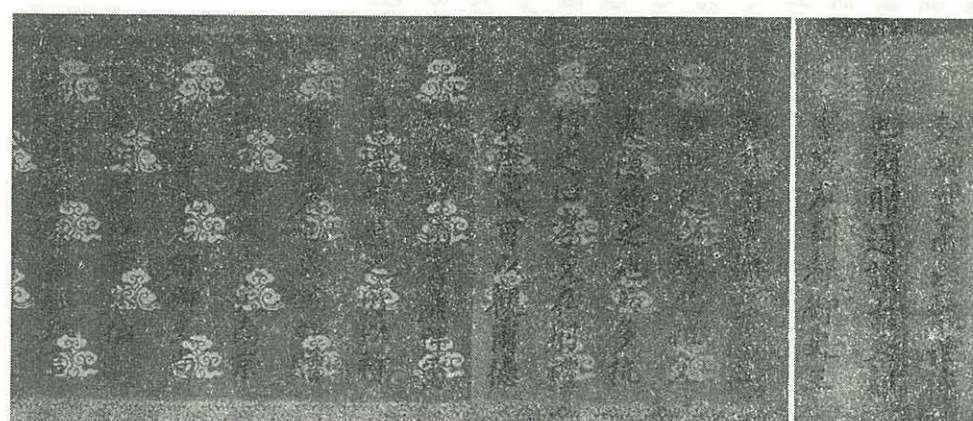
制誥之寶

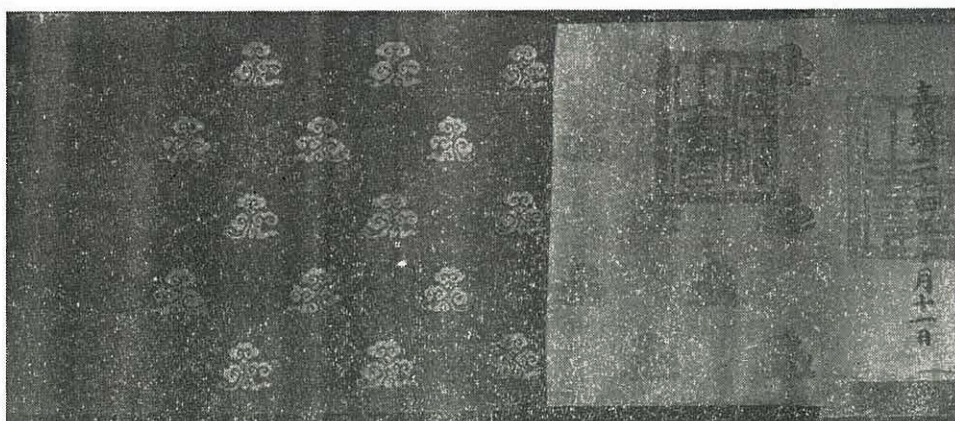
黑	白	
326.5	267.0	195.8

王以旂という人は明史卷一九九に本伝がある。字は士招、江寧の人で正徳六年の進士である。上高知県、兵部右侍郎、兼右僉都御史



豊臣秀吉を日本国王に封ずる詔命について（大庭）





總理河漕、を経て南京右都御史になり、工部尚書、左都御史に転じ、兵部尚書となり、兼ねて団營を督し、太子太保にまでいたり、死後少保を贈られ、襄敏と諡された。これはその南京都察院右都御史の時のものである。

大明会典卷六、吏部、驗封清吏司の文官封贈の項によれば、推封ということが行なわれる。

凡推封、洪武二十六年定、一品贈三代、二品三品贈二代、四品至七品贈父母妻室。とあり、本人が一品官であれば、曾祖父母、

祖父母、父母の三代に、二品官、三品官であれば祖父母、父母の二代に、四品より七品までは父母妻室に対して封贈される制度である。またどのように封贈されるのかということについては同じ所に、

凡封贈職級、洪武二十六年定、正一品至從七品、曾祖父、祖父、父、各照見授職事、依例封贈。正從一品曾祖母、祖母、母、各封贈夫人（後稱一品夫人）。正從二品祖母、母、妻各封贈夫人。正從三品祖母、母、妻各封贈淑人。正從四品母、妻各封贈恭人。正從五品母、妻各封贈宜人。正從六品母、妻各封贈安人。正從七品母、妻各封贈孺人。

となっている。

南京都察院右都御史は正二品の官である。従って推封は二代にわたるので、祖父の王詭と祖母の顧氏が推封の対象になる。祖母の顧氏は規定通り夫人が封贈されるが、顧氏の前封を、「爾贈淑人顧氏」としていることにより、この任官の前は王以旂は正從三品官であったことがわかる。これは以旂の伝に

累遷兵部右侍郎、徐呂二州洪竭漕舟膠命兼右僉都御史、總理河漕、踰年渠水通、進秩一等、尋拜南京右都御史。

とあるから、兵部右侍郎は正三品官で、その任官の時に顧氏は淑人を贈られたに違いない。そこで、嘉靖二十四年十月十一日は以旂が南京右都御史に拝せられた時ということになるだろう。祖父王詭の方は、贈通議大夫都察院右副都御史から贈資政大夫南京都察院右都

御史にうつっている。通議大夫は正三品、資政大夫は正二品の封贈文官散官である。都察院右副都御史、南京都察院右都御史は、いずれも会典に「各、照見して職事を授く」とある処置に應ずるものである。そうすると、以旂が南京都察院右都御史になったのに伴って、同じく正二品の資政大夫となり、同職を贈られているとすれば、その前の都察院右副都御史も同様と見られるから、王以旂は本伝には洩らしているが都察院右副都御史を経たと考えるのがよいと思われる。

それからこの誥命の地文であるが、二品官は獅子、夫人は鸛となっている。鸛は鸛とも鸛とも書き、「けいちよく」と読んでむらさきおしどりのことである。しかしいづれでもなく、おそらく瑞荷文であろうと思う。瑞荷文は三品、四品官に用いるが、贈官は一格おとすのであろう。従ってものと軸は金軸であったに違いない。

この誥命と豊臣秀吉の誥命とを対比して明かになることは、秀吉の誥命即ち一品官の誥命の場合は青赤黄白黒の五色がほぼ四十糧ごとに变化するのに対して、この誥即ち三、四品官のものでは約七十糧ごとに变化する。一品官の誥命の色の变化は遙かにテンポが早いというわけである。色がしばしば变化することはそれだけ手数がかかっているわけで、高級品であるといえるであらう。これは会典にも記載がなく、実物を見て明かになったことである。

ハ 万曆六年申時行同妻王氏誥命

豊臣秀吉を日本国王に封ずる誥命について（大庭）

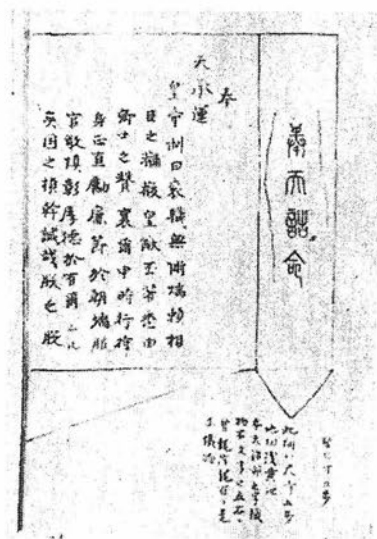
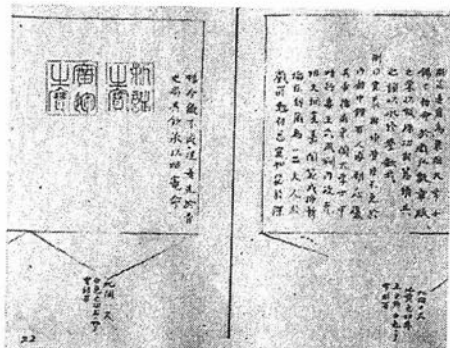
次に原形の様子が推測できるような著録の誥命をあげてみよう。

宮内庁書陵部に所蔵される舶載書目の第二十九冊、卷四十三の第二十一丁から二十三丁にかけて誥軸の略図がえがかれている。私は舶載書目は長崎奉行配下の書物改役向井氏に保存されていた記録を集めて作られたものと考えているが、この誥軸も唐船が持渡った品物と思われる。舶載書目の宮内庁蔵本は原本ではないが、仮に原本であるとしても向井家の記録から一度は転写されており、もとの姿から変ってきていることは否めない。略図の前、第二十丁には「享保二十年乙卯二月」存省劄記「万曆年中誥命之享有」と三行に書いている。この書き方では享保二十年二月に持渡られた存省劄記という書物の中に万曆の誥命の写しがあるというので、その部分を写しとったものかとの疑も出てくる記述法であるが、存省劄記という書物は知らないし、後にいう通り、誥命の色を和文で書いていることを考えてみると、やはり現物が渡来したと考えるべきである。

最初の部分には奉天誥命と篆書で書き、その下に

此間一尺寺六歩、地切淺黄地、奉天誥命之字織物、右文字也、左右ニ登龍降龍有リ是亦織物。

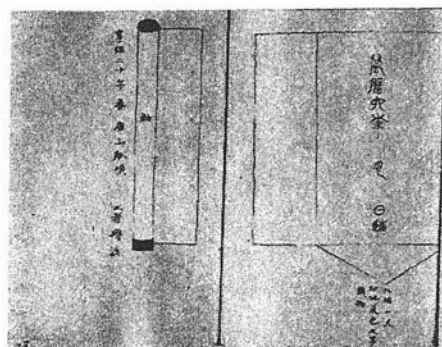
と注している。寺とあるのはもとは二寸とあったのを誤写したのであろう。誥命の実物を知るものにとっては、よくわかる注記である。つづいて本文が次のように書かれている。行立ては原物通りである。



奉

天承運

皇帝制曰褒職無懈端賴相
臣之黼黻皇猷丕著悉由
卿士之贊襄爾申時行持
身正直勵廉節於朝端服
官敬慎彰孝德於有爾允
矣國之楨幹誠哉朕之股
肱茲追爾爲東閣大學士
錫之勅命於戲弘敷章服
之榮以報殊功益篤綢共
之誼以永終譽欽哉
制曰宜象無煩勞臣不免於
內顧中饋有人盛朝應褒



制誥
之寶

廣運
之寶

其壺德爾東閣大學士申
時行妻王氏夙嫺內政克
相夫綱爰嘉閨範戎沛新
綸茲封爾爲一品夫人於
戲寵勉勿怠宜加恩於深
幃令儀不成堪垂先於青
史尙其欽承以昭寵命

萬曆六年 月 日造

文字には不明の字や誤字があり、奉天承運の天が例になく一字高
いが、恐らく原本から何次かへだたる転写本であることを思わせ
る。二十一丁表から裏にかけての分については、裏の部分に
此間二尺、地黄色切、参點之所白色ニテ雲形有
とし、二十二丁表には

此間一尺、白色之切、右ノ如ク雲形有
とする。また二十二丁裏には

此間一尺、切地風色、文字織物

と記す。従って前から、浅黄、黄、白、鼠と色を記していることにな
る。最初の浅黄色というのは青(実は緑)の褪色したものであろう。

それから、「此間二尺、地黄色切」としている部分は、他の部分が
いずれも一尺とするのにここだけが二尺となっている。それは前半
の一尺は赤色が褪色して黄色に近くなっているのを向井氏が気づか
ないで、合して黄色二尺と見たのである。最後の鼠色は黒の褪色し
たもので、秀吉の誥命でもそれを見て記録したもの、例えば史林聚
宝解説や鈴鹿郡野史などはいずれも薄鼠色と表現している。因みに
いえば、清朝の誥命では黒の部分の色が濃くなり、その部分の文字
は金泥又は黄色の顔料で書くようになる。

申時行は明史卷二一八に本伝がある。字は汝默、長洲の人で嘉靖
四十一年に進士第一に及第して翰林院修撰となった。次いで左庶
子をへて万曆五年には礼部右侍郎、やがて吏部右侍郎に転じ、権臣
張居正の知遇を受け、万曆六年三月、吏部左侍郎兼東閣大学士とな
り、礼部尚書兼文淵閣大学士、少傅兼太子太傅、吏部尚書建極殿大
学士などを経て十二年には少師、太子太師中極殿大学士にいたっ
た、明末の保守的な宰相である。

この誥命は申時行に東閣大学士を授け、夫人王氏を一品夫人に封
ずるもので、明史列伝の記事に従えば万曆六年六月のことである。
二十二丁裏の印の部分にその年月日を書いてあった筈だが脱してい
る。なお誥命の日附がそうであるとすれば、誥軸の織文も万曆六年
と書いているから造った年に使用した例になり、他には例がないこ
とになる。

また、夫人王氏あての制文には、「爾、東閣大学士申時行の妻王

豊臣秀吉を日本国王に封ずる誥命について（大庭）

氏」と、東閣大学士を肩書につけていることは注目される。

大明會典卷六の誥勅の條の記事によると

凡誥勅軸數、正統十二年定、一品五軸、二品三軸、三品二軸、四
品至七品俱一軸。天順元年奏定、一品四軸、二品三品三軸、四品
至七品二軸。

となっていて、東閣大学士は正五品の官であるから天順の規定で二
軸が与えられたことになり、この現物はその一軸というわけである
が、本来は本人に対する王命であり、任官の証となるものであった
から軽率に扱われる筈のないもので、明代の誥勅は勿論、我が国に
存する數量の遙かに多い清代の誥勅でも、接する殆どこの例は父
母、祖父母宛のもので本身の誥勅は少ない。その意味でこの誥命が
渡来していたことは珍らしい現象といわねばならぬ。

(二) 成化六年張謙之母王氏勅命

六品以下の官を授けるには勅命を用いる。勅命の实例は内藤乾吉
氏所蔵の成化六年八月二十六日附を以て、礼部給事中の張謙之母
王氏を孺人に封ずる勅命がある。その文は

奉

天承運

皇帝勅曰國家於任職

之臣必褒顯及其

親者所以重源本

也爾王氏乃禮科

給事中張謙之母

相夫教子善著聞

門宜錫典恩以示

褒顯茲特封爲孺

人服此茂恩永綏

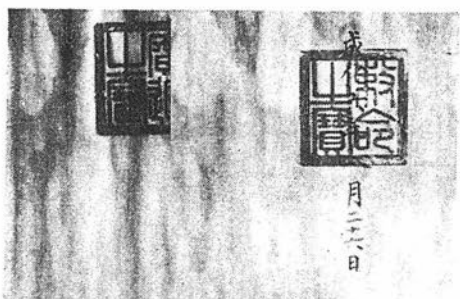
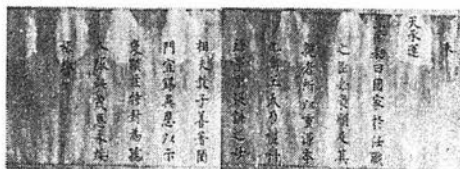
祿養

成化六年八月二十六日

卯字參百捌號

(敕命
之寶)

(廣運
之寶)



天順二年 月 日造
となつてゐる。

大明会典卷二〇一織造に、「勅は織るに純白の綾を用い、その前の織文に奉天勅命という」とある制にかなひ、白綾に書いてある。礼科給事中は万曆会典では五員あり、従七品の官で孺人は七品に相応ずる。この勅命は卯字三百八号とあり、会典卷二二二、中書舎人の条に、「三品以下十二支の字を用う」とあるものに相当する。なお日附の内、八月二十六日の八と二十六の数字が墨色が異なっている。別に書入れたものと思われるが、どのような手続で書入れるものかは明らかでない。告身、誥勅などの資料は案外高級官のものが注目されて下級官のものは減びてしまひやすいが、その意味で貴重なサンプルである。

(4) 嘉靖十五年張祿同亡妻廖氏繼室葉氏勅命

次に平戸の松浦史料博物館蔵の平戸藩樂哉堂旧蔵品に、模本の「明世宗勅獻陵衛經歷司收糧經歷張祿其亡妻廖氏繼室葉氏書」と題する勅命がある。忠実に模しているが、たて三二・五糧、よこ二〇二糧で、その文は次の通りである。なお頭初の篆書の奉天勅命の織文及び升降龍文も模されているが省略する。

奉

天承運

皇帝勅曰國家設幕僚于諸

天皇運
皇中初曰國家統華條于諸
衛以綜理文移其有職
同而守異事關國計者
尤必慎其人焉爾獻陵
衛經歷司收糧經歷張
祿列官戎幕出納軍儲
克慎克勤茂昭勞勛宜
頒渙命以爲爾榮茲以
大慶覃恩特授爾階徵
仕郎錫之初命爾其益
勵乃心弘乃業嗣膺顯
陟光我訓詞欽哉
勅曰朝廷褒錫羣臣追榮
厥配良以內外之職勞
悴相成恩宜逮也爾獻
陵衛經歷司收糧經歷
張祿妻廖氏早遂于歸
弗克偕老可無卹命以
旌徃勞茲特贈爲孺人
尚慰幽靈克歆殊渥
勅曰古者禮重宗婦室必
有繼肆國家推封之典
均焉爾獻陵衛經歷司
收糧妻廖氏早遂于歸
弗克偕老可無卹命以
旌徃勞茲特贈爲孺人

旌徃勞茲特贈爲孺人
尚慰幽靈克歆殊渥
勅曰古者禮重宗婦室必
有繼肆國家推封之典
均焉爾獻陵衛經歷司
收糧經歷張祿妻廖氏
氏俗米中績允嗣前微
宜錫褒章以昭閭閻茲
特封爲孺人茂進寵光
益敦厥成
勅曰古者禮重宗婦室必
有繼肆國家推封之典
均焉爾獻陵衛經歷司
收糧妻廖氏早遂于歸
弗克偕老可無卹命以
旌徃勞茲特贈爲孺人
尚慰幽靈克歆殊渥
勅曰古者禮重宗婦室必
有繼肆國家推封之典
均焉爾獻陵衛經歷司

豐臣秀吉を日本国王に封する詔命について（大庭）

收糧經歷張祿繼室葉
氏恪承中饋允嗣前徽
宜錫褒章以昭閭範茲
特封爲孺人茂迓寵光
益敦徽戒

嘉靖十五年十二月二十四日

〔敕命之寶〕

□字玖百肆拾捌號

〔廣運之寶〕

弘治伍年 月 日造

この勅命は、松浦静山が自ら撰したと思われる「平戸藩楽蔵堂蔵書目録外篇集録」の注に

勅書、林大学頭信衡ノ所蔵ナリ、寛政己未歳（十一年、一七九九
年）借寫ス、本書帛ニ書セリ、云々

と記すので、原本の所蔵者が林述斎であったと知れる。また目録の注文の中に先に引用した大明会典の卷二百一織造の条、誥勅の式様の文を引いて、「此文ニテ、始ノコトハ能分レリ」とし、後の織文弘治五年のことにもふれ、嘉靖十五年より四十四年以前だが、孝宗の弘治五年に織出して貯め置いたものを用いたのだと考証している。

この勅命は猷陵衛經歷司收糧經歷の張祿に徴仕郎を授ける勅がま

ずある。猷陵衛は明史卷九〇兵志二によれば親軍の一つで、もと武成左衛といったものを宣徳元年に猷陵衛と改めた。大明会典によれば各衛經歷司經歷は従七品相当の官である。收糧經歷の職務は勅文の中に「官は戎幕に列なり、軍儲を出納し」とあるように、軍糧の出納に当る主計官である。張祿が授けられる徴仕郎は、会典卷六の散官によると従七品陞授の散官の名である。従七品の散官にはほかに初授の従仕郎というものがある。会典によればはじめ官職につくと初授の散官が与えられ、歷俸三年の後に初考、即ち考課が行なわれて職に称うことが明らかになると陞授の散官が与えられることになっている。この制度に照らしてみると、張祿は猷陵衛經歷司收糧經歷という従七品の職事官に任ぜられ、従仕郎で三年間を経て考課をうけ、職に称うと判定された。「軍儲を出納し、克く慎み、克く勤め、勞勩を茂昭す」というのはそのことである。それで「宜しく煥命を頒ちて以て爾の榮と為さん、茲に大慶覃恩を以て特に爾に階徴仕郎を授け、之が勅命を錫はん」というわけで徴仕郎を授ける勅命が給付されたのであろう。それにともなって、夫に先立つた廖氏に孺人を追贈する第二の勅と、継室、即ち後妻の葉氏を孺人に封ずる第三の勅とが続いて記されている。この資料も明代官僚の日常の一端をうかがう事ができて面白いものである。それと同時に、張祿の勅命を前にして林述斎や松浦静山は如何なることを語り合ったのか、江戸時代人が明の遺物に如何に接したのであろうかがい知りたいものである。先の申時行誥命といい、この勅命といい、この

ような品も舶来していたことを物語る遺物であるが、ほぼ同時代の木村孔恭の「蒹葭堂書目」の中に「明嘉靖帝賜朱履璽書」と著録され、後に幕府へ献上されたものも、或いは同様の誥勅であるかも知れない。

結びにかえて

明代の誥勅に関していくつかの例をしめし、各個に考証を行ない、大明会典の記述を具体的にあとずけるように試みてみた。明代の誥勅や、それに附随する服制の一部について特に結論的に書くことはない。そこで結びにかえて、官僚任命に当って給付される辞令書の変遷の上から明代誥勅について考えられること、及び明以前、明以後との関連についての見通しを簡単にのべておきたい。

まず明代誥勅の著しい特色は、「奉天承運皇帝制曰」、或いは「奉天承運皇帝勅曰」という書き出しで、皇帝が直接官封を受ける者にあてて命を発し、文中に「爾何某」と呼びかける形式になっていることであろう。これは唐代の、中書、門下、尚書三省を経由する制授・勅授告身、尚書より門下を経て再び尚書省へかえる奏授告身にくらべて極めて簡明直截で、明代では皇帝が六部を直接支配し、皇帝権が強くなったという特色が具体的にあらわれていると言っている。この傾向は元代の宣に

上天眷命皇帝聖旨何某、可某官、宣令何某准此
という形式に少しあらわれているが、下級官の任命については、勅

を中書省が牒を以て伝達する形式をとり、明代の勅命と著しい違いがある。唐代の制授の形式は宋代にも伝っているから、宋と元との間に形式上の変化があり、この点は将来考究すべきところであるが、中央政府の機構の変化が辞令書の形態に直ちに影響することは確かであるから、宋代になお唐の制授の形式が残存する意味がむしろ興味ある問題になると思う。

清朝の誥勅は、文体は明と変らないし、誥軸の模様、色彩など明制をついでいるが、満洲語と漢語と両方で書いてある点が著しい違いになる。満洲文が誥勅の最初から、左から右へ書かれ、漢文は軸の所から中央に向って、右から左へ書かれ、双方の日附が中央で背中あわせになるという形態となっている。従って明の誥勅は左側に軸があつて右から開くが、清の誥勅は右側に軸があつて左から開くことになる。清代の遺例は見出すのにさほど苦労はいらない。

次に辞令書の材質の問題にふれると、木から紙へと変った辞令書は、宋代には絹となり、明では錦となる。この変化も興味のあることであるが、ここで甚だ面白いのは、日本の位記のことである。日本の位記の書き方は、養老公式令の位記式からやがて唐の制授告身の形式となり、そのことは延喜式卷一二、中務省内記の条にみえる。ところがその後は、江戸時代を終るまで、この形式の位記が、紙に書かれて授与されつづけて来た。武家政権ができて、また、中国では絹から錦へと変化していても、唐式の位記がいざんとして紙に書かれて用いられていたのである。いかに天皇に実権がなかった

とはいえ、江戸時代の諸大名は幕府の推薦を得てこの位記で位を授けられていたのであって、それが全く無意味なものでは決してなかった。こう考えてみると、明代の誥勅が錦綵に書かれていることと対比してみても、日本に沈澱した中国文化に、或いはそういうふう文化を沈澱させる日本文化の体質に、新たな問題を感じるのは私人ではないだろうと思う。

注

- ① 大庭 脩 漢代官吏の辞令について 「関西大学文学論集」一〇一一
昭和三十五年四月
- 同 魏晉南北朝告身雜考—木から紙へ— 「史林」昭和三十九年
一月号
- 同 唐告身の古文書学的研究 『西域文化研究三』敦煌・吐魯
番社会経済史料下』昭和三十五年三月
- 同 龍谷大学所蔵吐魯番出土の張懷瓘告身について 「龍谷大
学論集」三五九（小笠原宣秀と共著）昭和三十三年七月
- 同 建中元年朱巨川奏告身と唐の考課上・中・下 「史泉」
一一・一二・一八 昭和三十三年八月・十月、昭和三十五年六
月
- 同 唐元和元年高階真人遠成告身について—遺唐使の告身と位
記—「関西大学東西学術研究所論叢」四一 昭和三十五年三月
- ② この研究は、昭和三十九年度文部省科学研究助成金（各個研究）の補
助を、「日本に残存する資料による明代誥勅の研究」のテーマに対して
受けた。本稿はその研究成果である。

- ③ この問題には古くから色々の研究があるが、石原道博氏の『文禄・慶
長の役』（塙書房、昭和三十八年七月刊）は極めて有益であった。また中
国人の手になるものに李光濤『万曆二十三年封日本国王豊臣秀吉考』
（中央研究院歴史研究所專刊五三、一九六七年七月、台北刊）がある。
- ④ 豊臣秀吉が明の冊封の事を怒り、その国書を破り捨てたという俗説が
あることは衆知の事であらう。それが頼山陽の『日本外史』あたりに端
を発することは、例えば市村瓚次郎氏の『東洋史統』などにもみえてい
ることで、特に新しくいう程のものではない。所が、この誥命がどのよ
うに伝来したかについては、伊勢亀山藩主石川家（明治以後子爵）に伝
ったことは比較的よく知られているが、何故石川家に伝わったかについ
ては余り穿鑿されていない。この点について私が亀山市文化財保護委員長
で、もと亀山報徳会幹事であった加藤文郎氏の教示を得た所によれば、
柴田厚二郎氏著『鈴鹿郡野史』（昭和二年一月十五日刊）の三五六頁に
コノ冊封文ハ堀尾家ニ蔵セラレ、後ニ至リ吾亀山城主石川家ニ伝リ、
累世江戸邸在勤大目附之ヲ保管セシガ、廢藩後旧藩主ハ華族ニ列セラ
レ、次テ東京ニ移住セシ以来私邸ニ蔵シ、現代ノ主成秀子爵ニ及ベリ。
亀山報徳会幹事石川直記、同会員天野可美等ノ談ニヨレバ、此冊封文
ハ綾絹ニ書レタル者ニシテ、青黄赤白薄鼠ノ五色ニ班チ長徑五六・
六種、幅徑三一・五種ニシテ雲鶴ノ模様ヲ織出シ、日附ヲ記セル部分
ニ「制誥之宝」ノ印ヲ船シ次ニ契印アリ。
- と記しており、堀尾家より石川家に移ってきたことがわかる。また『史
林聚芳解説』には
伝ふる所に依れば、秀吉怒りて冊封を擲つや、堀尾吉晴獲て之を蔵せ
しが、後姻戚なる伊勢亀山藩主石川子爵家に移り、以て今日に及べり

と云ふ。

と記し、何故堀尾家に伝ったかを窺うことができる。

加藤文郎氏は、堀尾家から石川家へ興入のあった時に移された由が伝っていることと教示された。堀尾から石川への興入は石川忠総に堀尾吉晴の女が嫁したことを指す。寛政重修家譜によれば、忠総は天正十年に生まれ、慶安三年に六十九で卒しているが、その中に

(慶長)三年より東照宮につかへたてまつり、五年上杉景勝御征伐のとき、御小姓組の頭となりて下野国小山にいたる。……さきに小山に御在陣のとき、堀尾信濃守忠氏も供奉にありしが、其妹をもつて近習に嫁せむことを請たてまつる。これ其異心なきをしめすなり。東照宮その志を感じたまひ、則仰によりて忠総と婚を約す。

と記すのがそれである。亀山藩士にはこの時、堀尾家から石川家に移った藩士がいくつかある。従って、江戸の初期から石川家にあったわけである。

重文指定は昭和十三年七月四日、昭和二十一年に大阪の増田啓一氏に譲られ、昭和三十六年、大阪市立博物館開設に伴なって大阪市内に譲られたものである。

⑤ かつてこの文書の調査には現愛染女子短大助教授角山幸洋氏に同行をわづらわした。挽匠の解釈は角山氏の教示による。

⑥ 専らこの誄命についてもをあげておく。

則堂 明封豊臣秀吉冊書 芸風一——一九三三。

— 館蔵品解説の内に 大阪市立博物館報№1 一九六一。

三品彰英 明王贈豊太閤冊封文 日本美術工芸三〇七号、一九六四・四。

⑦ 元代の宣の例は、神田喜一郎 八思巴文字の新資料 『東洋学文献叢

豊臣秀吉を日本国王に封ずる誄命について(大庭)

説』所収 一九六九・三。

⑧ 宣祖実録卷五一、二七年五月条。後に全文を掲げる。

⑨ 明穆宗実録卷五五 隆慶五年三月庚午所見。

⑩ 図書寮典籍解題 三古文書 一七〇頁に明神宗贈豊太閤書と題して解題がある。

⑪ 例えば善隣国宝記卷下の宣徳八年六月十一日の別幅と比較してみると理解できる。

⑫ 滝川政次郎 清代文武官服制考 史学雑誌五三一—一九四二・一。

⑬ 妙法院の衣類については大阪女子大学村山修一教授の配慮を恵われ、また同院執事園部健吉氏の教示を得た。「豊公遺宝図略」の存在は園部氏に教えられ、その後幸いに購入することができた。

⑭ 前掲「図書寮典籍解題」の秀吉宛勅諭の直前に掲載されている。

⑮ この文書はかつて昭和三十一年に米沢市立図書館の善本調査におもむいた時に衣服と共に見学したが、寸法については昭和三十九年八月に私の問合せに対し上杉神社宮司大乗寺良文氏より教示を得た。

⑯ この資料及び写真については毛利博物館の佐伯敬紀氏の御世話になった。

⑰ 同編纂所田中健夫氏の教示によれば、編纂所は神田孝平氏所蔵の原本より模写した由である。

⑱ この資料は昭和三十八年夏に同博物館において閲覧したが、今回研究を公表するにあたり、同館木田昌宏氏をわづらわして写真を入手した。

⑲ 天明元年に臨写した由は、模本の右下に書いてある。その筆者は「蕉中識于以酌之太室」とあって蕉中という僧であるが、以酌というのは以訥庵のことで慶長十六年に玄蘇が対馬に創建した臨済宗の寺である。

以厩庵は享保十七年に焼失、その後西山寺が京都五山より下る輪番僧の寓所になり、以厩庵の什物も引ついだという。「津島紀事」「全国寺院名鑑」などによる。天明元年に写させた人は松浦静山であることは申すまでもない。

②① 仙巢稿巻下に大明万曆皇帝特賜日本本光禪師号并蜀錦伽梨之日兵部尚書奉命割付曰として引用する。なお大明万曆皇帝特賜云々の肩書は仙巢稿中にしばしば見え、玄蘇が禪師号を名譽として感じていたことを認めなければならない。

②② 玄蘇が僧衣を与えられたことはこの節の始にひいた石星の題本に「其日本禪師僧玄蘇、応給衣帽等項」とあるので明らかであるが、西山寺に現存する金襴の袈裟は甚だしく破損している。昭和四〇年夏、第十五次関西大学千里山法律学会法生活実態調査団が対馬の調査に行った時、一行に加われた本学法学部助教沢田嘉貞氏にお願いして写真を写していただいたが、殆んどもとの姿をとどめていない。

②③ 山辺知行・神谷栄子編 一九六九年四月 講談社刊。

②④ 明史紀事本末六〇によると、隆慶四年十月、俺答の孫把漢那吉がその属阿力哥等十人を率いて来降したので、把漢那吉を指揮使に、阿力哥を正千戸にして各々大紅紵絲の衣一襲を与えたとあり、その後、那吉は「蟒衣貂帽、馬を駈せて帰り報じた」とあって、蟒衣が与えられている。また同じく五年三月、俺答王を封じた所では、大紅五綵紵蟒衣一襲を賞したことが出てくる。

②⑤ 滝川政次郎博士は前掲「清代文武官服制考」の六七―六九頁に、昭和十六年五月、第四十二回史学会大会上杉家の家什展観にあたって明の割付を写しとして紹介され、明服と清服の違いにもふれて居られる。た

だその中で、「袍の色は緋でなければならない筈であるが、実物は青色である」とし、袍の色が青いのは不可解である旨を述べていられるが、或いは下着の色との間違いがおこっているのではないかと思われる。

②⑥ 大庭脩 「卓弥呼を親魏倭王とする制書」をめぐる問題 『末永先生古稀記念古代学論叢』 一九六七・一〇。

②⑦ 大庭脩 唐元和元年高階真人遠成告身について ―遣唐使の告身と位記― 関西大学東西学術研究所論叢四一 一九六〇・三。

②⑧ 大庭脩 唐告身の古文書学的研究 『敦煌吐魯番社会経済資料(下) 西域文化研究三』 所収 一九六〇・三。第二章・第二節・十。なおこの告身の文字は従来敦煌石窟第一六三窟外側壁に塗られこめられていた刻石によって解説考証され、私もそれによったのであるが、陳祚龍氏は敦煌写本「洪晷・悟真等告身」校注 大陸雜誌二四―一 一九六二・一 において拙稿の文字を敦煌写本によって正し、また竺沙雅章氏も敦煌の僧官制度 東方学報京都三一 一九六一・三 において敦煌文書の中から洪升・悟真の關係の文書を多く紹介されている。

②⑨ 史料編纂所太田晶二郎教授の教示による。

③① 大庭脩 『江戸時代における唐船持渡書の研究』 一〇八頁―一二二頁。なお、舶載書目に関する詳細な研究はいずれ公表したい。

③② 注④参照。

③③ この模本の調査と写真に関する経過は注⑩と同じである。

③④ 大阪府立図書館蔵本による。

③⑤ 神田喜一郎 八思巴文字の新資料 附大元累授臨川郡吳文正公宣勅『東洋学文献叢説』所収。この論文によって今まで元時代の辞令の資料がなかった所が補なわれた。本文に元代の宣の書式を推定し得たものこ

の論文に資料が紹介された結果である。

③ 例えば鶴清館法帖におさめる范純仁の告身を見られたい。

④ 滝川政次郎 唐の告身と王朝の位記 『支那法制史研究』所収 一九四〇・四。

補注一

田能村竹田の屠赤瑣瑣録卷五に、前田玄以の劄付について次の記事がある。

一、明の萬歴の天子より前田玄以法印を都督食事の官に挙げたりし敕書を搢紳家に珍藏し給ひしを拝見せしに、唐紙の大なるやうなる紙にて四辺に画欄あり。手迹も甚見事成ものなり。外にうつし置ぬ。

補注二

次の論文があることを印刷に入ってから知ったが見ることができなかったので、記載するにとどめる。

明主より豊太閤へ贈れる書 東洋学会雑誌 二一六（一八八八年三月）

明主豊公に贈れる書及上杉小西等諸士への劄付 東洋学会雑誌二一八

（一八八八年七月）

貴重な資料の写真の掲載を快諾された上杉神社、大阪市立博物館、宮内庁書陵部、豊国神社、松浦史料博物館、毛利博物館の各位に対し厚く御礼申上げる。